

聖徒の道

1974年4月20日発行（毎月1回20日発行）第18巻4号
昭和49年12月18日第二種郵便物認可

聖徒の道
4 1974

これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。（ヨハネ17：1－5）

その時天より声ありてわれらに証せる福音、すなわち喜びの音信とはかくの如し。それ、イエスは世に來りたもうて世のため十字架に附けられ、世の罪を負い、世を聖くし、あらゆる不義を潔めたもう。これ、彼が御父より手の中にわたされて造りしあらゆるものを彼によりて救わんためなり。

（教義と聖約 76：40－42）

も く じ

- 146 次代に引き継がれた大管長会……………ラリー・ヒラー
 150 大管長会メッセージ／心の傷をいやす……………ハロルド・B・リー
 152 最も価値ある一週間……………ダニエル・H・ラドロウ
 165 少年そうさく隊……………メアリー・ジョイス・カプス
 168 最初の復活祭……………
 170 ねことねずみのおはなし……………ベティー・ハブカ
 172 おもちゃばこ……………
 173 黄色いお皿……………カイ・ライマン・ビショップ
 174 誘惑に立ち向かうには……………ロバート・J・マッシューズ
 176 「逸話集、近代の使徒の生涯より」……………レオン・ハートショーン
 — ヒーバー・C・キンボール —
 182 感謝を神に捧げん……………ゴードン・B・ヒンクレー
 186 <モルモン思想の古典>死者の贖いの示現……………ジョセフ・F・スミス
 190 ローカル・ニュース

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 デルバート・L・ステイプラー
 リグランド・リチャーズ
 ヒュー・B・ブラウン
 ハワード・W・ハンター
 ゴードン・B・ヒンクレー
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・パッカー
 マービン・J・マッシュトン
 ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
 (内務伝達部長)
 ジョン・E・カー (配送翻訳部長)
 ドイル・L・グリーン
 (教会誌編集主幹)
 ダニエル・H・ラドロウ
 (教会教課企画調整主任)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木 沼 修 一

ローカル編集

高 木 まりゑ

今 月 の 表 紙

救い主の贖いの犠牲は、歴史上最も偉大な出来事である。またゲツセマネの園における出来事は、救い主がご自分に従い、贖いの犠牲を受け入れるすべての人々に赦しの賜と永遠の生命を約束された福音のメッセージを美しく象徴している。

ハリー・アンダーソン筆の表紙の「ゲツセマネ」と裏表紙のジョージ・オーツの写真はいずれも贖いの偉大さと復活の新鮮さ、栄光を示すものである。

聖 徒 の 道 4 月 号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5-8-10
 配 送 東京ディストリビューション・センター
 東京都港区南麻布5-10-25
 定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
 海外予約 1,800円

次代に引き継がれた大管長会

編集主幹 ラリー・ヒラー

リー大管長

1899年3月28日、米国アイダホ州クリフトンの小さな町で、ハロルド・ビンガム・リーは産ぶ声をあげた。そして1973年12月26日、74歳で逝去の折には数百万の人々がその死を悼み、世界各国の政治、宗教、実業各界の名士が哀悼の言葉を寄せた。

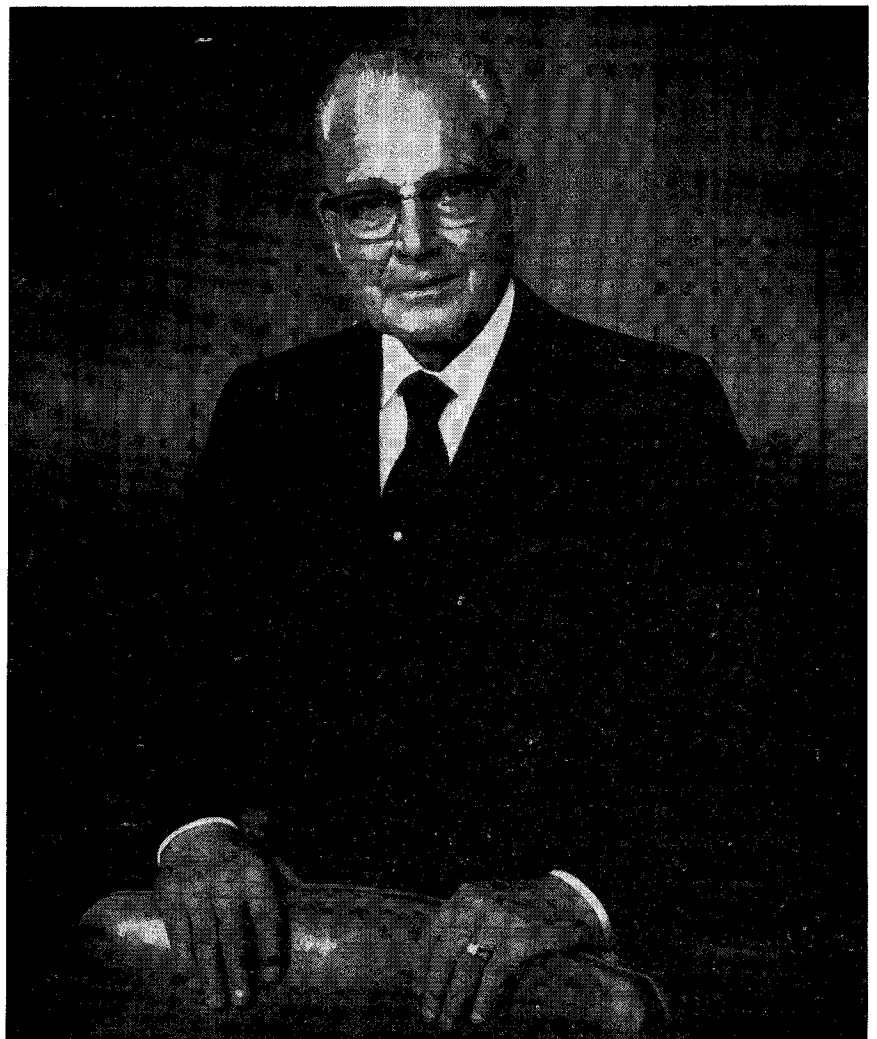
教会大管長としての彼の在任期間はわずか1年半余りで、歴代大管長のいずれよりも短い。しかしハロルド・B・リーの、隣人の物的、霊的福祉に対する貢献は、大管長となる1972年7月7日のずっと以前に始まっていたのである。彼は32年間教会幹部を務め、その時期に、多くの重要な教会プログラムを指導し、発展させた。彼の奉仕活動と献身は、さらにそれ以前にさかのぼる。

リー大管長の教会での大きな責任は1929年、パイオニアステーク部（ソルトレークシティー）副ステーク部長の召しに始まる。その翌年には、31歳で同ステーク部ステーク部長に召された。不況が始まっていた年で、若きステーク部長はステーク部内の教会員扶養のチャレンジに遭遇した。過半数の男性が失業し、家族を養う手だてを持たなかったのである。リーステーク部長は靈感を受けて倉庫を建設し、食料や日用品を困窮者に分配した。そしてそれ

が施しとにならないように、労働計画を実施した。解体した建物を素材に、社会活動やレクリエーション活動を行なうステーク部体育館を建設したのである。

1936年にヒーバー・J・グラント大

管長は、全ステーク部のそのような福祉活動に注ぐ総力を結集、調整し、教会保護プログラムと呼ばれる計画を発足させた。後にそれは教会福祉プログラムとして知られるようになった。リー大管長はその初代管理役員に召され



ハロルド・B・リー大管長

長期にわたり教会福祉委員会の委員長を務めた。

1941年4月10日、ヒーバー・J・グラント大管長はハロルド・B・リーを使徒に聖任した。彼は使徒としての多くの重責と合わせ、教会の全カリキュラムを調整する相互調整委員会の委員長となった。次いでデビッド・O・マッケイ大管長の死去に伴い、リー大管長はジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長を補佐する第一副管長となった。

リー大管長は悲しみを知った人である。しかしそれは彼を強めるだけであった。1962年、彼がステーク部大会に出席している間に、妻のファーン姉妹は生死の境をさまよっていた。病床にかけつづけたときには、もう命の灯は消えていた。また1966年、彼が責任でハワイに行っている間に、娘のモーリン姉妹が4人の子供を残して他界した。

1963年にリー大管長はフレダ・ジョーン・ジェンセン姉妹と再婚したが、十二使徒評議員のヒンクレー長老の言葉によれば、夫人は「リー大管長の生涯を完全なものにした」という。

ハロルド・ビンガム・リー大管長は非常に霊的な人であった。彼は主と主の聖徒たちを深く愛していた。大管長に聖任されて間もなく、彼はこのように語った。

「私たちは主の霊的導きにすがるのである。私たちはみたまに導かれて動くのである。

私はただこのことを望むだけである。全世界の教会員に私の今感じているこの親愛の情が届いて、すべての人が私の心の内と私の愛とを知ると。あらゆる人が大管長会と教会幹部

の愛を知ると、あなたがた全員に私の愛と祝福を送る。」

リー大管長は、一致と全世界の聖徒たちの兄弟愛を強調した。

「私たちはイギリス人でもドイツ人でもフランス人、オランダ人、スペイン人、イタリア人でもない。私たちは皆末日聖徒イエス・キリスト教会のバプテスマを受けた教会員である。また、使徒パウロが言うようにアブラハムの子孫であり、約束に従って世継ぎとなる人々である。」(1973年8月25日、ミューンヘン地区総大会)

大管長就任の際の彼の言葉は、自分の召しに対する課題であると同時に、聖徒たちに与える告別の言葉ともなるであろう。「教会の安寧は、戒めを守る教会員にかかっている。私の申し上げられることで、これ以上に大切なことはない。あなたがたが戒めを守るとき、祝福がもたらされる。」

リー大管長の死去に伴い、大管長会は自動的に解任され、2名の副管長は十二使徒評議員会に戻り、新大管長の選出と聖任まで十二使徒評議員会が教会の管理組織となった。リー大管長の突然の死に驚く人がほとんどであったが、移行は円滑に行なわれ、終始平静であった。教会業務が引き続き整然と進められるのを見て、非教会員の幾人かは驚嘆の声をあげた。世の組織にみられるような抗争やかけ引きは無縁であった。聖徒たちは、主がすでに予言者として働く人を備えておられ、神殿の中に集まった十二使徒評議員会が靈感によりその人を選ぶと、知っていたのである。

キンボール大管長

ジョセフ・スミスの死以来、代々十二使徒評議員会会長である前任使徒が教会の大管長になってきた。1973年12月30日日曜日、十二使徒評議員会はソルトレーク神殿に集まり、末日聖徒イエス・キリスト教会大管長にスペンサー・ウーリー・キンボールを選んだ。彼は副管長にN・エルドン・タナー、マリオン・G・ロムニーを指名した。

キンボール大管長はエズラ・タフト・ベンソン長老を十二使徒評議員会会長に任命した。その後ベンソン長老が十二使徒評議員会を代表して、キンボール大管長を第12代教会大管長に聖任した。キンボール大管長の使徒就任は1943年10月7日で、十二使徒評議員会会長となったのは1972年7月7日であった。ベンソン長老の使徒聖任の日も1943年10月7日であった。

キンボール大管長はリー大管長の死去についてこう語っている。「私たちはこのことが起こらないようにと祈った。ハロルド・B・リー大管長のために祈った。毎日、朝な夕なに、私たちはリー大管長の長命と福利を祈った。私はその責任が私に課せられるかもしれないことを承知していた。だが私はそれを求めはしなかった。今、私はまだ最善を尽くそうと思う。」

キンボール大管長は、1895年3月28日ソルトレークシチーに生まれた。父は、ブリガム・ヤング大管長時代の使徒であり副管長であったヒーバー・C・キンボールの末の子のひとり、アンドリュー・キンボールである。

キンボール家は1898年アリゾナ州に移り、アンドリュー・キンボールはセ

ントジョセフステーク部のステーク部長に召された。キンボール家にとっては、教会が家庭生活の中心であり、子供たちは奉仕と労働の尊さを教えられた。

「私は執事として聖餐を配ったときのことを覚えている。教会で受けた最初の責任は執事定員会の会長だった」とキンボール大管長は語る。

彼は少年時代、学資と伝道費用を貯めるために酪農場で懸命に働いた。伝道の召しはスイス・ドイツ伝道部であった。しかし1914年に戦争が勃発して、

伝道地は合衆国中央伝道部に変わった。そこで彼は「管理宣教師」となり、30名の宣教師を指導下に置いた。それは指導者としての特性を大きく伸ばした時期であった。

キンボール大管長は伝道を終えた後アリゾナ大学に戻り、勉学を続けた。そしてこの時代にカミラ・アイリング嬢と出会い、1917年11月に結婚した。翌年1月、キンボール大管長はステーク部書記に召され、この責任をステーク部長である父が死去するまで6年半にわたって務めた。彼は新しく組織さ

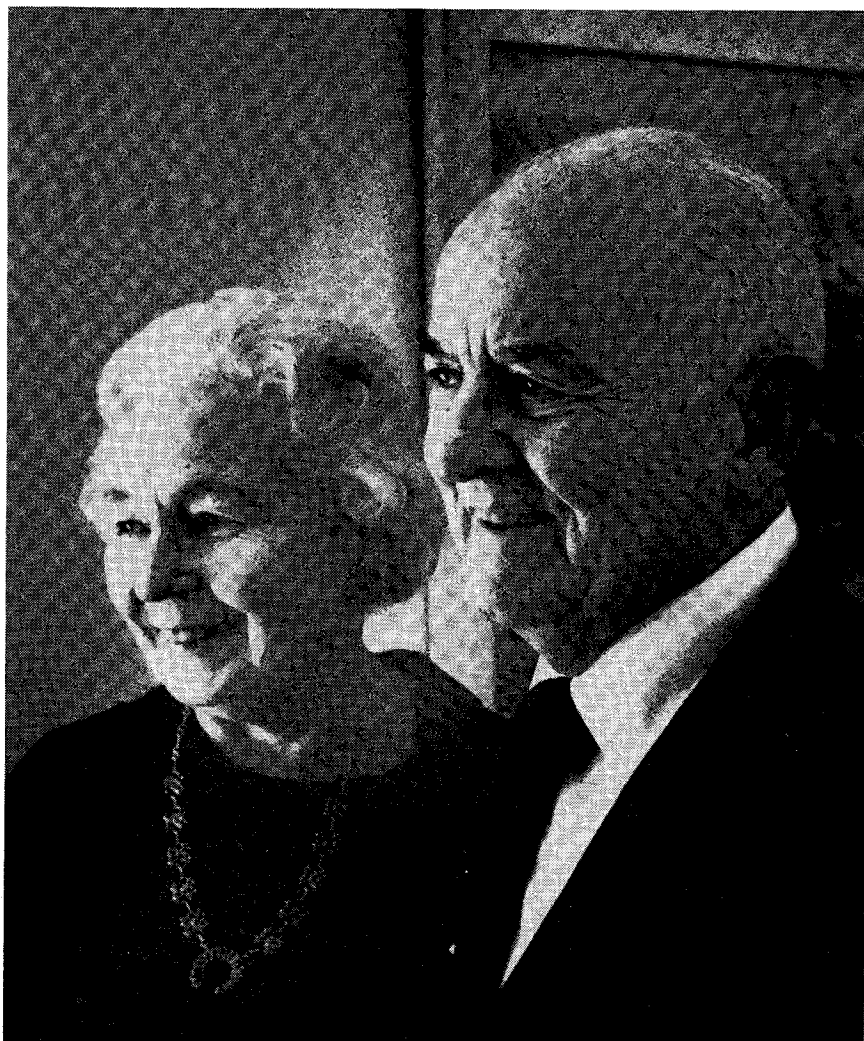
れたステーク部長会の第二副ステーク部長となり、ステーク部長会で12年間働いた。そしてステーク部が分割されると、新しくできたマウントグラハム・ステーク部のステーク部長に召された。十二使徒評議員会会員に召されたのはその6年後のことであった。

キンボール大管長は教会幹部として召されてから、福音を携えて世界各地を旅してまわった。伝道事業に彼は非常な愛着を持ち、このように語っている。「どの国からももっと大勢の宣教師が必要である。各国からできる限り多くの宣教師を出すべきである。私たちがそのように努力して、扉を叩けば主は道を開いて下さり、これまでよりもずっと多くのことが達成できることを、私は知っている。

私は、多くの神殿が立って世界各国の人々に役立つときを心待ちにしている。」

キンボール大管長はこのように述べている。「現代生活の諸問題は、もし両親が正しい生活を営み、子供たちに模範を示すならば、家庭の夕べによって解決できる。もし子供たちが年若くして福音を守り始めるならば、彼らは生涯を強く生き抜くであろう。私たちに主のプログラムがある。私たちが教会でしているすべてのことは主の業である。今、私たちはそれをより良く行なおうと努めなくてはならない。」

キンボール大管長は数年前に大きな心臓手術を受けたが、現在、健康は良好であるとの診断が出ている。キンボール姉妹は次のように言った。「私は、主は夫を愛しておられるのだと信じて疑いません。夫の健康に関して、それが奇跡であると私たちは思っています。



キンボール大管長と姉妹



タナー副管長と姉妹

20年間にわたって、夫は主の力を受けて健康を維持してきました。」

スペンサー・W・キンボール大管長は、常に教会活動に積極的に携わってきた。彼は、主に対する愛と奉仕から一時たりともはずれたことがなかった。

タナー副管長

1973年12月30日、N・エルドン・タナー副管長はキンボール大管長の第一副管長に任命されたが、この召しに任命されたのはこれが4度目である。彼は2年間を十二使徒補助、1年間を使徒として、通算わずか3年間で教会幹部として働いた後、1963年10月、デビッド・O・マッケイ大管長の第二副管長として初めて大管長会に召された。

その後、ジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長の第二副管長、およびハロルド・B・リー大管長の第一副管長としても働いた。



ロムニー副管長と姉妹

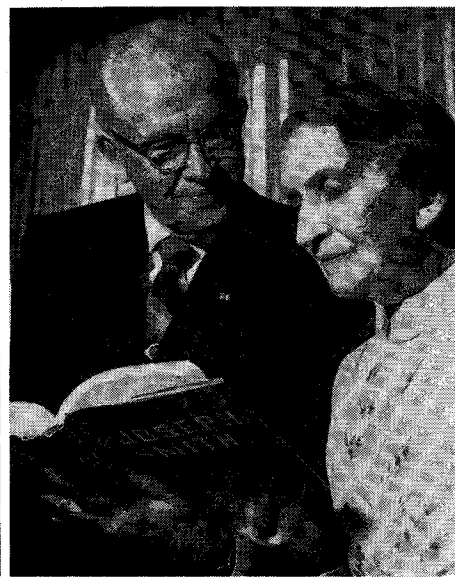
ロムニー副管長

マリオン・G・ロムニー副管長は、1941年5月23日、43歳の年齢でヒーバー・J・グラント大管長により十二使徒定員会補助に任命された。その後1951年10月11日には使徒に聖任された。また1972年7月7日、ハロルド・B・リー大管長の第二副管長に任命された。

ベンソン長老

十二使徒評議員会会長の召しについて、エズラ・タフト・ベンソン長老はこう述べている。「聖なる使徒職、人に授けられる神権の最も大きな職を受けることは、この上ない名誉である。しかしこの高貴な召しを受けた人々のグループの会長に召されることは、身も霊も圧倒されんばかりである。

私はへりくだり、感謝してこの召し



ベンソン会長と姉妹

を受ける。この業を愛し、親しい友である十二使徒の兄弟たちを愛するがゆえに。私は彼らのどんな指導にも喜んで従いたいと思う。」

ベンソン長老は、1899年8月4日アイダホ州ホイットニーの家で、ジョージ・T・ベンソン・ジュニアとサラ・ダンクリー・ベンソンの11人兄弟の長子として生まれた。

ベンソン長老は農場で育ち、農場経営学を学んだ。彼は農業に関した業績で教会外でも有名であり、そのひとつとして、200万農家を擁する連邦農業協同組合の推進があげられる。彼はまた、ドワイト・D・アイゼンハワー内閣の農務長官を務めた。

ベンソン長老とフローラ夫人にはふたりの息子と4人の娘、30人の孫がある。夫妻は家族を誇りにしている。

ベンソン長老は教会幹部として世界の各地をまわった。彼の語るところ、聖徒たちは強い証を感じ、主と聖徒たちに対する大きな愛を感じた。彼は実に神の人である。

心の傷をいやす

ハロルド・B・リー大管長

どこの国においても、身内の者を失なって心中に葛藤を覚えた人が何千何万といる。また、現在まさにそのような境遇にある人もあるだろう。心に平安を得たいと渴望する人々に、私たちは何と言えよいのだろうか。どう言って恐れを静めるように語りかけ、心の傷をいやすとあげればよいのだろうか。また、今日のすさんだ試練の時代を越えて、現世のあなたにある来世で希望や夢が実を結ぶことを悟らせ、その時を待ち望ませるには、何と言ってあげればよいのだろうか。

ここで少し聖典の中にある約束に注目していただき、それを簡単に説明しよう。そうすることによって、理解と平安と希望をこのメッセージでお伝えしたいと思う。

主は弟子たちに、究極の平安がどこから来るかを示された。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14:27)

私たちの前途に横たわる永遠の世界をかいま見させるような重要な出来事が、主の復活に続いて起こった。主の復活にいたるまでの経緯は、聖書に詳しく記されている。聖書は、キリストが裏切られた恐ろしい夜のことで、正義を全くなぶり物にした、あの性急な法を無視した裁判のことを記している。続いて私たちは、主が十字架の上で苦悩のうちに死んでゆかれた姿を、心眼をもって目撃することができる。主の埋葬のために新しい墓が用意されていた。しかし、そのカルバリに近い園の墓は、再び空になっていた。そして、墓を守っていた守護天使が、輝かしい勝利の宣言をしたのであった、

「もうここにはおられない。……よみがえられたのである。」(マタイ28:6)

ここで復活体の主が最初に目撃された。それはあらゆる点で完全な、完成されたイエスであり、人々が生前に知っていたと同じ、触知し得るまぎれもないイエスであった。

しかし、最初の復活の朝に起こったのは、それだけではなかった。予言者モーセのもとに苦闘していた民に、主はモーセを通して希望の約束をされた。そしてその約束を成就して、次の言葉、すなわち荒野で試練を受け苦しんだ後に、「あなたの死人は生き返り、私のなきがらはよみがえります。」(イザヤ26:19、新改訳)という約束を与えられた。

聖書のマタイの記録は、800年後にその約束が成就した驚くべき状況を伝えている。そこを読んでみよう。「また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現われた。」(マタイ27:52, 53)

愛する人々の死を悲しんでいる方々、この日のことを考えていただきたい。皆様の愛する人々の墓は開け、彼らの体も同じように出てきて、生きている人々の国にはいり、多くの人に現われるであろう。アメリカ大陸の予言者たちも、完全な復活体について説明している。そのひとりはこちら宣言している。「……一すじの髪の毛さえも失われず……このように相合したものはみな霊性体となって不滅となり再び朽ちることがないのである。」(アルマ11:44, 45)

さらに、死んで墓のあなたに行った人々に、もうひとつの栄光に輝く期待がある。主と弟子たちが、サマリヤのヤコブの井戸で、女に井戸の水を飲ませて欲しいと頼んだとき、主はこの女とその友に次のように宣言された。この宣言は来世の状況について視野を大きく開くものである。それは最初に予言の言葉で始まっている。「よくよくあなたがたに言うておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。」そして、これを聞いて誤解が生じないようにするためであろうか、繰り返して言われた、「このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、……さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。」(ヨハネ5:25, 28, 29)

死んだ人々が再び神の子の声を聞けるとは、何という輝かしい約束であろうか。

時間の関係で、救い主の復活に関して、もうひとつの重要な出来事を簡単に取り上げるにとどめよう。主の体は、復活

「人はそれぞれ罪から救われるために、できる限りのことをしなければならない。そうすれば、イスラエルの聖者による贖いの恵みにあずかることを期待できる。」

して出てこられるまで、3日間墓の中に横たわっていたことを覚えておられるだろう。また、救い主が復活の後、弟子たちの間に約40日間滞在され、飲食を共にし、教えられたこと、聖霊の賜を与えられたことも思い出されよう。

主はその間、体が墓に3日横たわっていたとき、どんなことが起こったかを弟子たちに話されたに違いない。なぜなら使徒の頭であったペテロが、書簡の中で主の体が墓に横たわっていた3日間に起こったことを、次のように説明しているからである。「……霊においては生かされたのである。こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの……いた間、……従わなかった者どものことである。……」（Ⅰペテロ3：18, 19）そしてその理由を次のように述べている。「死人にさへ福音を宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」（Ⅰペテロ4：6）

確かに私たちは、だれかが死んでその人を失ったとき、悲しみいたむ。ことに栄光ある復活の望みをもたない者のために、さらに歎き悲しまなければならない。また使徒パウロの次の言葉は、私たちに平安と慰めを与える確かな宣言である。彼は説明している。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（Ⅰコリント15：22）

西大陸の古代の予言者は、人が現世においても来世においてもこの永遠の特権の中で最高のものを得るには、どのような義務を果たさなければならないかを、わかりやすい言葉で明確に示している。「だから私たちが力をつくして書き誌すのは、自分たちの子孫と兄弟たちを説得してキリストを信じさせ、神との一致を得させるためであり、それは人が最善をつくしてはじめて、神のめぐみにより救われることを知っているからである。」（Ⅱニーファイ25：23）

言いかえれば、人はそれぞれ罪から救われるために、できる限りのことをしなければならないのである。そうすれば、イスラエルの聖者による贖いの恵みにあずかることを期待できる。すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによって救われるからである。

イエスが贖ったのは、アダムの咎だけではなく、全人類の罪も含まれていた。しかし、個人の罪が赦されるかどうかは、個人の努力にかかっており、人は自分のなした業に応じて裁かれる。

復活はすべての人に来るが、キリストに従う者だけが、永遠の救いという豊かな祝福にあずかることができる。聖典はこのことを明らかにしている。パウロは、ヘブル人にイエスのことを説明して、こう書いている。「彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救いの源とな」られた。（ヘブル5：9）

さて、あの栄光に輝く日に、イスラエルの聖者が死に打ち勝たれたので、私たち全人類の前に贖いの計画が示されることとなった。今やだれひとりとしてこの恵みにあずからない者はいない。そこで私たちは、この復活祭の朝、パウロと共に次のように喜びの叫びをあげることができよう。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。……しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである。」（Ⅰコリント15：55, 57）

私は、全地の人々がひとり残らず、人類の救い主の贖いの重要性をさらに十分理解するように、へりくだって祈っている。この救い主は、私たちを永遠の生命へ導く、すなわち神とキリストの住みたもう所へ導く救いの計画を、私たちに与えられた。私は、皆様や私のために命を捧げて下さった方の聖なる名前によって、以上のことのため誠心誠意祈り、以上の真理について、心から証するものである。誠に然り、アーメン。



Harold McFee

最も価値ある一週間

日月火
日月火
日月火
日月火水木金土

日月火水木金土

日月火水木金土

日月火水木金土

日月火水木金土

日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土

日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土

日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土
日月火水木金土

この世の歴史が最後まで書き上げられて、歴史上の出来事を永遠の見地に立って評価するとするならば、その多くの出来事は取り上げるにふさわしいものかどうかという点で競い合うであろう。しかしながら、これまでこの地上に生を受けた人々、あるいはこれから生を受ける人々すべてに対するその意義について考えるとき、救い主の生涯における最後の週の出来事ほど偉大な意義深い週は史上にまたとないと、ためらわずに言うことができる。その最後の週とは、勝利のエルサレム入りを行なった日曜日の朝から、復活を遂げた次の日曜日の朝までである。この週の数々の出来事、特にゲッセマネの園での出来事と復活のときに起こった出来事がなければ、その他すべての事柄は全く意味を失うのである。

このような記事は、聖典に記録されているその週の出来事を詳しく論ぜず、ただ列挙するだけでも明らかに十分であろう。それでこの記事では、日にひとつかふたつの出来事のみを取り上げて幾分詳しく論じ、またその他の事柄についてはごく簡潔に述べることにする。

最初の日（日曜日）

創造のとき以来、週の最初の日

曜日である。この日曜日、すなわち史上最も大切な週の最初の日、救い主は小さな村ベタニヤを発って、坂道を、5キロほど離れたエルサレムに向かった。救い主は、親しくしていたマリヤ、マルタ、ラザロと一緒にベタニヤの村でその安息日を過ごされたのであった。

救い主は、ベテパゲ付近で弟子たちを遣わして、御自分がろばに乗ってエルサレムに入ることができるように、小さなろばを連れて来させたもうた。このことは、予言を成就するばかりでなく、イエスが平和のうちに来られたことを示すものでもあった。

マタイが記録しているように、非常に大勢の群衆が出て来て、主の前に自分たちの上着と木の枝を敷き、主を迎えた。そして叫び続けた。「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ。」（マタイ21：9）

これらの行為はすべて敬意の表われであり、「ダビデの子」という呼びかけは、群衆が救い主イエスを長い間待ち望んでいたメシヤとして受け入れたことを物語っている。なぜなら、これはメシヤに宣べる言葉として定められていた神聖な称号だからである。

なぜ信仰心のある一般民衆に、イエス・キリストをメシヤとして受け入れ

る備えができていないと言えるのだろうか。イエスは予言者の言葉を成就しなかったのだろうか。予言者が語っていたように、ダビデの子孫を通じてのユダの子孫ではなかったのだろうか。ベツレヘムの町で、マリヤと呼ばれる処女から生まれていたのではなかったか。

イエスは、エジプトから呼び出され、ナザレで成長し、また数々の出来事を通して、自然界と人間の諸器官を統御する力をあらわされたのではなかったか。イエスは、水をぶどう酒に変え、風と波を鎮め、足なえ、盲人、つんばを癒された。また確かに死んでいた人を再びよみがえらせたもうた。これらはすべて、予言者によってその成就が告げられていた「偉大な奇蹟」の一部である。また予言者ゼカリヤが予言したように、救い主はろばに乗って、聖なるエルサレムの都に入ったのであった。

一般民衆が大挙してイエスに従い、「ダビデの子」、メシヤとして迎えたとして、何ら驚くには及ばない。明らかに多くの人々は、イエスが今こそ都に入り、すでにメシヤについて宣べられている他の数々の予言が成就するのを期待していた。その予言の中には、メシヤがイスラエルの軍を治め、彼らを

日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土
 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土
 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土
 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土 日月火水木金土

ダニエル・H・ラドロウ

率いて諸々の敵を打ち破り、地上に平和と公明、正義の時代を打ち建てるという予言がある。イエスはそれまでの行ないで予言者の言葉を成就していた。従ってその時も確かに予言者の言葉の残りを成就するはずであった。

歴史と予言者が示してきたように、当時の信仰篤いユダヤ人は、救い主が再降臨のときに行なわれるはずのことを、最初の降臨のときに行なわれるものと考えていたことに大きな誤りがあった。モルモン経の予言者ヤコブは、

ゲッセマネの園



救い主の誕生される何百年も前に、ユダヤ人はメシヤが来られても「思い違いをして」(ヤコブ4:14)メシヤを拒むであろうと告げている。

救い主はその後、「カイザルのものはカイザルに……返しなさい」(マタイ22:21)、また「わたしの国はこの世のものではない」(ヨハネ18:36)という言葉を残された。そこで人々は、「ダビデの子に、ホサナ」という叫び声を、「十字架につけよ」という叫びに変えたのであった。また後に、一般民衆の中でイエスを信じていた者たちはイエスに裏切られたと思い、その結果イエスを敵の手に渡すことに同意したのであった。しかしエルサレム入りした最初の日曜日には、まだ「ダビデの子に、ホサナ」という叫びが上がっていた。

これらの叫び声は、オリブ山から谷を越えて、神殿まで達していた。そこには、パリサイ人と、嫉妬深い宗教指導者、国事の指導者が集まっていた。彼らは民衆が救い主に与えるこの賛辞に驚異の目を見張り、「世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」(ヨハネ12:19)と叫んだ。

救い主はエルサレムの近くまで来ると、その住民に下る将来の滅びのことを心に深く思い、その都を見て涙



を流された。エルサレムに入ってもなお救い主の心は騒いでいた。そこで天父に祈られた。「父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。」すると天から声があった。ある人々はその声は雷だと言い、またほかの人々は「御使が彼に話しかけたのだ」と言った。(ヨハネ12:27, 29)

それから救い主は、光の子について教えを説かれた。それは、光が「もうしばらくの間」共にあることを人々に知らせ、「光のある間に、光の子となるために、光を信じ」るようにとさすためであった。(ヨハネ12:35, 36)

それから「もはや時もおそくなっていたので、十二弟子と共にベタニヤに出て行かれた。」(マルコ11:11)

第2日(月曜日)

翌月曜日の早朝、救い主はまたベタニヤからエルサレムへ戻られた。マタイはこのことを次のように記録している。

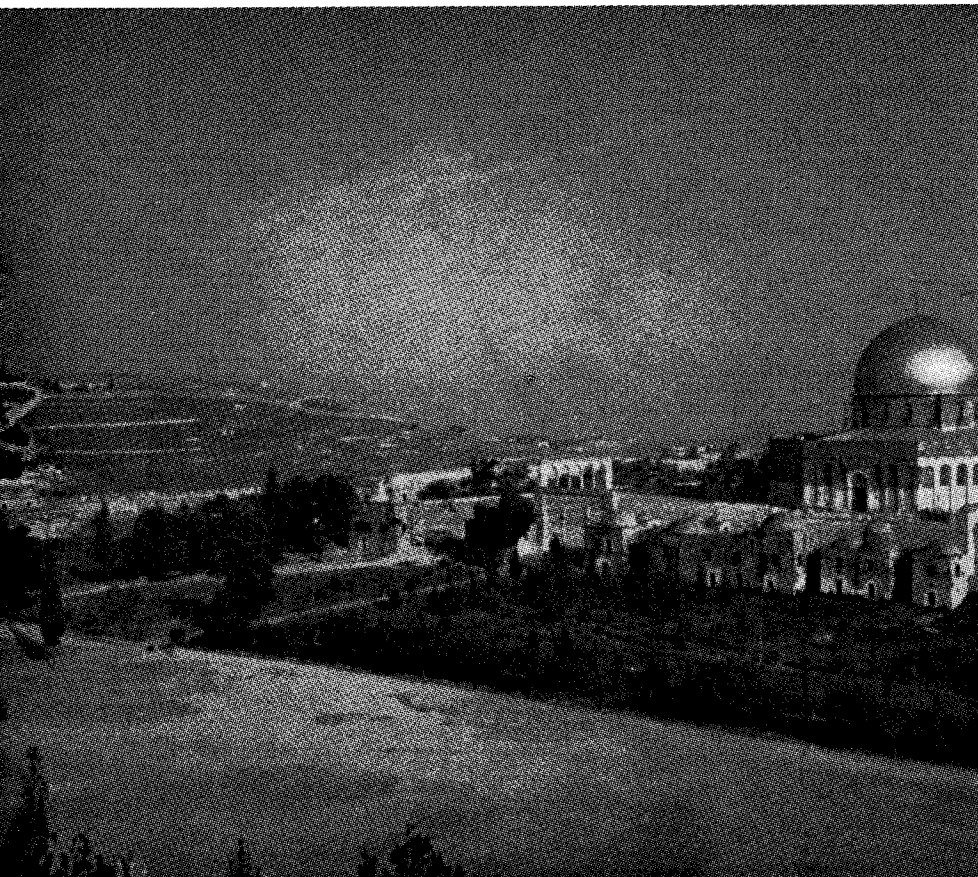
「朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。

そして、道のかたわらに一本のいちじくの木があるのを見て、そこに行かれたが、ただ葉のほかは何も見当らなかった。そこでその木にむかって、

『今から後いつまでも、おまえには実がならないように』と言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯れた。

弟子たちはこれを見て、驚いて言った。『いちじくがどうして、こうすぐに枯れたのでしょうか。』(マタイ21:18—20)

いちじくの木が枯れたこの出来事は、救い主の現わされた他の奇蹟と非常に異なっているために、多くの人々が理解に苦しむ。これまで救い主は、苦しむ者の苦悩を取り去り、また人を益する目的と祝福のために惜し気なく力を使ってこられた。事実、死者をよみがえらせたもうたこともあった。しかし



エルサレムの城壁を背にするキドロン谷

エルサレムの神殿用地。右の建物は、回教寺院「岩の堂」

ここで救い主は、最後の裁きについて告げるため、いちじくの木を枯らされたのである。弟子たちはこの出来事から、紛れもなくひとつの偉大な教訓を学んだのである。彼らは特に、救い主が人に生を与えるだけでなく、死をもたらす力をも備えておられることを確かにここで理解したのであった。これによって彼らは、救い主ならば、以前言われたように、自らの意志で命を与えることがおできになるかも知れないと感じた。弟子たちはその週を終える前に、この教えを思い起こす機会を得たのであった。

弟子たちはこの出来事からもうひと

つの教えを学んだと思われる。それは、弟子たちも、その他いかなる人であっても、実際にはない状態を装うべきではないということである。葉の繁ったいちじくの木は、実を持っているかのように装っていた。普通、いちじくの葉と実と一緒に生育するからである。しかし葉の繁ったこのいちじくの木は、それに反して実を結んでいなかった。

ジェームズ・E・タルメージ長老は、その木は実がないためではなく（3月末から4月上旬にかけては、いちじくの木はどれも同じ状態であった）、実を結んでいるかのように見え、「偽善者」を象徴していたのでのろわれた、

と解釈している。

週の第2日の日に起こったもうひとつの出来事は宮清めである。ある福音研究家は、マタイ21：12とルカ19：45から、この出来事を最初の日、日曜日のこととしている。しかしながら、マルコ11：11, 15から、これを月曜日に起こった出来事と解釈している人もいる。

正確な日は別にして、救い主が先に神殿から両替人を追い払った時からその週までは3年経過していた。3年前、救い主は「わたしの父の家を商売の家とするな」（ヨハネ2：16）と言って彼らを責められた。しかしこのたびは、

救い主は御自分がメシヤであることを公言し、神殿を「わたしの家」と言っておられる。救い主は聖文を引用して言われた。『わたしの家は、祈りの家となえらるべきである』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」(マタイ21:13) その週の終わる前に、救い主はその神殿についてエルサレムの反抗的

な住民たちに、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われるのである。(マタイ23:38) 所有者を表わす言葉がこのように変わったことは、興味深くもあり、重要でもある。

心のかたくなな宗教指導者たちは、救い主のこの態度に腹を立てた。そして、「祭司長、律法学者また民衆の重立った者たちはイエスを殺そうと思っ

ていた。」しかし一般の民衆は「熱心にイエスに耳を傾けていた。」(ルカ19:47, 48)

祭司長、律法学者たちは、救い主が神殿でみもとに來た盲人と足なえを癒されたのを見て、さらに立腹した。また、神殿で子供たちが「ダビデの子に、ホサナ」と叫んでいるのを聞いて怒った。



エルサレムから望むオリブ山

マタイは次のようにその出来事の記録を結んでいる。「祭司長、律法学者たちは、……イエスに言った、『あなたたちが何を言っているのか、お聞きですか』。イエスは彼らに言われた、『そうだ、聞いている。あなたがたは「幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた」とあるのを読んだことがないのか』。

それから、イエスは彼らをあとに残し、都を出てベタニヤに行き、そこで夜を過ごされた。」(マタイ21:15-17)

第3日(火曜日)、第4日(水曜日)

火曜日と水曜日の出来事は、その多くが相互に関連しており、さらに彼らがどちらの日に起こったものか聖典からは必ずしも判然としないので、ここでは一緒に取り扱う。

しかしながら、一般民衆がメシヤに愛と関心を示した日曜日と月曜日の出来事以降、国事と宗教上の指導者は共に、民を率いる主の力に恐れを感じたと、はっきり記録されている。彼らは救い主に挑み、民衆の目前で存分に信頼を失わせることができると考えた。このため、彼らは時間をかけてよこしまな質問を計画し、救い主の信頼を失わせることにした。

救い主が神殿に入られたとき、神殿の聖職者を代表して、最初の団が質問するために来た。彼らは、救い主が両替人を追い払い、また神殿を「強盗の巣」にしていると非難したことのみを心に留めていた。彼らは、綿密に準備

した質問をもって救い主に語りかけた。「何の権威によって、これらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか。」(マタイ21:23)

救い主はそれに対してこのように問い返された。「わたしも一つだけ尋ねよう。あなたがたがそれに答えてくれたなら、わたしも、何の権威によってこれらの事をするのか。あなたがたに言おう。ヨハネのバプテスマはどこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか。」(マタイ21:24, 25)

代表として来た者たちが、実際に彼らの信じていたことをもって答えず、民衆の反応を気にして彼らの答えを考慮したことは注目値する。

「彼らは互に論じて言った、『もし天からだと言え、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。』

しかし、もし人からだと言え、群衆が恐ろしい。人々がみなヨハネを預言者と思っているのだから』。

そこで彼らは、『わたしたちにはわかりません』と答えた。すると、イエスが言われた、『わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい』。」(マタイ21:25-27)

次に救い主は問う立場に代わり、「あなたがたはどう思うか」という言葉にはじまり、続く3つのたとえ話を集まった人々にされた。ふたりの息子のたとえ話と、悪い農夫のたとえ話、王子の婚宴のたとえ話がそれである。(マ

タイ21:28-46; 22:1-14参照)

次の一団は、ヘロデ党であった。彼らはヘロデとローマの指導者の統治を支持し、いかなる新しい宗教指導者をも排斥しようと努めていた。彼らは次のような悪計に満ちた質問をした。

「『それで、あなたはどう思われますか、答えてください。カイザルに税金を納めてよいでしょうか、いけないでしょうか』。

イエスは彼らの悪意を知って言われた、『偽善者たちよ、なぜわたしをためそうとするのか。』

税に納める貨幣を見せなさい』。彼らはデナリー一つを持ってきた。

そこでイエスは言われた、『これは、だれの肖像、だれの記号か』。

彼らは『カイザルのです』と答えた。するとイエスは言われた、『それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい』。」(マタイ22:17-21)

救い主を陥れようとした次の一団は、サドカイ人であった。彼らはユダヤ教の一派に属しており、パリサイ人に公然と反対し、復活の教義等、宗教上の多くの論点でパリサイ人と意見を異にしていた。このときサドカイ人たちは、ひとりの女性が7名の兄弟と次々に結婚しては死に別れてしまうという、現実にはありそうもない極端な例をあげて質問した。「復活の時には、この女は、七人のうちだれの妻なのでしょう。」というのが、その問いである。(マタイ22:28)

救い主は、実際の問題点が、彼女はだれの妻になるのかという点でなく、現に復活があるのかないのかという点にあることを感じ取られた。そして、永遠の結婚関係はこの地上で神権の権能によって発効することを指摘して、彼らの質問に直截簡明に答えられた。「復活の時には、彼らはめとったり、とついだりすることはない」というのが、その答えであった。

次に主は、質問の本質に切り込んだ。「死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。」(マタイ22：30—32)

その場に居合わせた心の正直な者は、救い主の使われた論法に、口をはさむ余地のないことをすぐに認めた。アブラハム、イサク、ヤコブはすべて何百年も昔に死んでいるにもかかわらず、なお神が御自分は彼らの神であると言っておられる。神が生きている者のみの神であるならば、アブラハム、イサク、ヤコブはなお生きているに違いないのである。そこにいた律法学者のうちある者たちは言った。「先生、仰せのとおりです。」その論法にサドカイ人は沈黙してしまった。そして「彼らはそれ以上何もあえて問いかけようとしなかった。」(ルカ20：39, 40)

最後の一団はパリサイ人であった。彼らは質問を準備して来たが、その中

のひとりの律法学者が主に尋ねた。

「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか。」(マタイ22：36) マルコは次のように記している。

「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか。」(マルコ12：28)

しかしながら、救い主の答えははっきりしていた。救い主は、モーセがイスラエルの人々に語ったとほとんど同じ言葉で答えられた。モーセはその言葉をもって、彼らの子供たちに熱心に教えるようにイスラエルに命じたのであった。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」(マタイ22：37—39)

パリサイ人にそのように答えた後、救い主は次に問う側になり、彼らにお尋ねになった。「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか。」彼らはすぐに「ダビデの子です」と答えた。

「イエスは言われた、『それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。……

このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか』。

イエスにひと言でも答えうる者はなかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなっ

た。」(マタイ22：42—46)

それから救い主は弟子たちの方に向き直り、群衆の聞こえる所で、律法学者とパリサイ人の偽りの教えと習慣について彼らに教えられた。救い主は、自称牧師に対してしばしば偽善という言葉を使われ、彼らを「へび」、「まむしの子ら」と呼んで非難の言葉を結ばれた。(マタイ23：33)

次に救い主は、エルサレムのことを嘆き、またこの地にかつて送られた大勢の予言者と、さらに民がどのようにたびたびこれらの予言者を拒んだかについて、民衆に思い起こさせたもうた。救い主はまた、破壊がその民と都に下ることを宣言し、「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」と神殿についても語られた。(マタイ24：2)

それから救い主はオリブ山に行かれた。そこで弟子たちは、ひそかにみもとに来て、エルサレムの崩壊と、世の終りまで続くその後の出来事についての予言を説明して下さるようにと願った。この件に関する救い主の教えは、福音書の3章にわたっている。(マタイ24, マルコ13, ルカ21)

さらにこれらの教えを一層はっきりさせるために、救い主は、この神権時代に予言者ジョセフ・スミスにそれらを明らかにされた。これらの教えは、高価なる真珠、ジョセフ・スミスの著その一として公にされている。特に救い主は「われこれらのことを選民のために汝らに告ぐ」(23節)と語っておら

れる。それ故、救い主とその教えを選び、従おうと決心した人はみな、これらの靈感に満ちた教えを丹念に学びなおす必要がある。

救い主は、弟子たちからあげられたそれらの問いに答えられた後、新約聖書に記録されている続く3つのたとえ話を語って、その日の教えを結ばれた。十人のおとめのたとえ話、タラントのたとえ話、避けられない裁きのたとえ話の3つがそれである。

それから救い主はベタニヤに戻り、そこで夜を過ごし、目前に横たわる苦しい試練のために備えられた。

第5日（木曜日）、第6日（金曜日）

5日目、木曜日の朝の出来事については、聖典にはほとんど詳しいことは記されていない。記録によると、その日のうちのいつか、イスカリオテのユダは「祭司長やパリサイ人たち」とキリストを裏切り、彼らの手に渡すことを謀った。また救い主は、過越の食事をどこで用意すればよいかについて、弟子たちに指示を与えられた。

過越の食事のときに幾つかのすばらしい出来事が起こった。エルサレムの都のある人の「席を整えて用意された二階の広間」で食事が行なわれた。(マルコ14:14, 15参照) ここで、イスカリオテのユダが救い主を裏切る者であることが、明らかにされたわけである。ここで主の晩餐の聖餐が定められた。またここで、救い主は弟子たちの足を洗い、彼らにこの儀式を引き続き

行なうよう告げられた。

ユダがその場を去った後、救い主は残りの弟子たちに次の言葉をもって新しい戒めを与えられた。「互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34) また救い主が「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22:32) とペテロに勧告を与えられたのもこの日であった。

救い主は、間もなく御自分が弟子たちのもとを去ること、しかし慰めのないまま放置することはなく、彼らに「別の慰め主」聖霊を送ることを、弟子たちに告げられた。そして、「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう」(ヨハネ14:26) と、その働きを説明された。

次いで救い主は、ぶどうの木とその枝についての偉大な比喻を話された。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。…わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。」(ヨハネ15:1, 5)

これに続いて、救い主は「大祭司としての祈り」を捧げておられる。「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。

あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

永遠の生命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたかわされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ17:1-3)

「時がきました」という言葉の通り、救い主は間もなく二階の部屋を出て、オリブ山へ、またゲッセマネの園へおもむいたのであった。そこでは、世界の歴史の中で最も重要かつ私たちの理解を絶するような出来事が起こった。救い主がアダムとイヴの原罪を贖われたのはここである。また全人類の罪を、その罪を悔い改める程度に応じて御自分の身に受けられたのもここにおいてである。

ゲッセマネの園における出来事と、続く3日間に起こった事柄は非常に重要であった。救い主はそのために、「わたしはこのために、この時に至ったのです」(ヨハネ12:27) と語られたのである。

救い主は、ゲッセマネの園を去るにあたって、ユダと「祭司長、宮守がしら、長老たち」に会った。彼らは救い主を裁判にかけるため捕えようとして来たのであった。(ルカ22:52)

その夜の残る出来事と、翌日（金曜日）の主要な出来事は、四福音書の著者によってあげられている。救い主は、大祭司（カヤパ）とサンヒドリンの前に引き出され、不法な裁判にかけられ

た。そこで救い主は初め、治安妨害の罪に問われたが、次にユダヤの律法では最も重い(神の力を不正によそおう)冒瀆の罪で訴えられた。

救い主は「あなたは神の子キリスト

神を汚したという罪状は、

ローマの法律で最も重い反

逆罪にすり替えられた。

なのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」(マタイ26:63)と直接に問いただされたとき、「わたしがそれである」(マルコ14:62)ときっぱり答えられた。すると背信の大祭司は叫んだ。「彼は神を汚した。どうしてこれ以上、証人の必要があろう。」「彼は死に当るものだ。」(マタイ26:65, 66)

このようにして、史上最も思いがけない出来事が起こった。というのは、神の力を不正によそおうことなどあり得ない神の子イエスが、神を汚す罪で有罪とされたからである。アダムが堕ちて以来、肉体の死に打ち勝つ力を持つ唯一の御方であるイエスが、死を宣告されたからである。しかしながら死罪を宣告する権限は、ローマの勅令によってユダヤ議会から取り上げられていた。そのためサンヒドリンの指導者たちは、公に死刑の判決が下されるように、救い主をピラトのもとに送った。

救い主はこのようにして、当時カイ

ザリヤに住み、たまたまユダヤの祭のためにエルサレムに来ていたユダヤの総督、ポンテオ・ピラトの前に引き出されて、裁判を受けることになった。

そこでピラトは彼らの訴えを聞くと、自分は関りがないと告げた。そのためその罪状は、ローマの法律で最も重い反逆罪にすり替えられた。反逆罪の嫌疑を救い主にかぶせるために、サンヒドリンの者たちは、救い主がカイザルに貢を納めることを民衆に禁じたと、偽りの訴えをおこした。「(カイザルのものはカイザルに返しなさい)」というのが実際の救い主の言葉であった。マタイ22:21)、また彼らは、救い主が自ら王と名乗ったと言って非難した。(ルカ23:2) そこでピラトは救い主に直接尋ねた。「あなたがユダヤ人の王であるか。」(ルカ23:3) するとイエスは、「わたしの国はこの世のものではない」と答えられた。(ヨハネ18:36)

ここでピラトは救い主に何の罪も認めず、釈放しようとした。ところがこのとき、祭司のひとりが、イエスは「ガリラヤからはじめてこの所まで」反逆を説いてまわったと訴えた。(ルカ23:5)

イエスがガリラヤ人であることを知るや、ピラトはすぐに救い主をヘロデのもとに送って裁いてもらうことにした。ガリラヤの領主であったヘロデも、過越の祭りのためにエルサレムに来ていた。しかし、救い主はヘロデの投げかける問いに答えるのを拒んだ。

そこでサンヒドリンの者たちは、救い主に死刑の宣告が下されるようにと願って、再び救い主をピラトの前に連れて行った。

ピラトはなおも救い主に何らの罪も見出せなかった。そこで、「彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」(ルカ23:16)と言った。過越の祭のたびにひとりの囚人を赦すことを習わしとしていた。民衆は、ピラトがこの権利をイエスに与えようとしていたことに気づいた。そこで民衆は「バラバをゆるしてくれ」(ルカ23:18)と叫んだ。こうして暴動と殺人のかどで捕えられていた者が赦され、無実の御方が残されたのである。

ピラトが民衆に、イエスをどうするように願っているのかとの最後の問いに対し、彼らは大声で叫んだ。「十字架につけよ、彼を十字架につけよ。」(ルカ23:21)

そこでピラトは、自分はこの人に何の罪も見出さなかったと答え、その血の責任を負わないため手を洗った。すると「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」(マタイ27:25)という、恐ろしい非難の叫びがあがった。それでもピラトは、救い主を罰し、むち打つだけで去らせようとした。そのとき、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」(ヨハネ19:12)と、とげのある言葉を投げる者がいた。この言葉



イエスが十字架にかけられた丘として多くの
人に知られているゴルドンのカルバリー

は、カイザルから今の権限を受けているピラトにとって、非常に痛烈なものであったことがわかる。

この結果ついにピラトは、十字架の刑に同意し、イエスをむち打つため兵士たちに引き渡した。

その後イエスはゴルゴタへの苦しい道を歩まされた。救い主の肉体は疲れ切ってしまったため、クレネ人シモンが十字架を運ばされることになった。

それより先、ピラトは、ヘブライ語

とギリシャ語、ラテン語で「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」という言葉を十字架上に書くように命じていた。ユダヤ人の指導者たちが、その言葉を「ユダヤ人の王」から「この人はユダヤ人の王と自称していた」と変えるように申し出たとき、ピラトは答えた。「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」と。(ヨハネ19:21, 22)

救い主が十字架に釘づけされたのは、6日目(金曜日)の午前9時頃で

あった。釘づけされた痛みにもかかわらず、救い主は静かにローマの兵士たちを見おろして言った。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」

(ルカ23:34)

昼頃大きな地震が起こった。ほかに数々のことが起こったが、聖所の幕が裂けるという出来事もあった。また、太陽は光を失い、「全地は暗くなって、三時に及んだ。」(ルカ23:44)

午後の3時頃、「わが神、わが神、
どうしてわたしをお見捨てになったの
ですか」(マタイ27:46)と、救い主
は叫んだ。次いで救い主は言われた。
「すべてが終った。」(ヨハネ19:30)

地を治める権利を授けられ
ていた御方は、すべての者
が永遠に生きることができ
るように、御自分の命を捧
げられた。

「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねま
す。」(ルカ23:46)

このようにして、御父から地を治め
る権利を授けられていた御方は、私た
ちすべての者が肉体の死を克服して永
遠に生きることができるよう、進ん
で、御自分の命を捧げられたのであっ
た。

宗教上の律法によると、安息日に遺
体を葬らずそのままにしておくこと
は、良くないことであった。そこで日
没が近づいたので、救い主に従ってい
た人々は、遺体を十字架からおろし、
急ごしらえて不完全ながら、埋葬の準
備をした。遺体は、弟子のひとりであ
る、アリマタヤのヨセフが申し出た墓
に納められた。

このようにして、おそらく世界の歴
史中最も暗い日、6日目の金曜日が終
わった。

第7日(土曜日)

救い主の体が墓に横たえられていた
第7日目の出来事については、新約聖
書にはほとんど記されていない。四福
音書の中で最も広く知られているの
は、「おきてに従って安息日を休んだ」
(ルカ23:56)という、ルカの記した
簡潔な言葉である。

しかし後にペテロは、その7日目の
出来事を幾つか語っている。

「キリストも、あなたがたを神に近
づけようとして、自らは義なるかたで
あるのに、不義なる人々のために、ひ
とたび罪のゆえに死なれた。ただし、
肉においては殺されたが、霊において
は生かされたのである。

こうして、彼は獄に捕われている霊
どものところへ下って行き、宣べ伝え
ることをされた。……

死人にさえ福音が宣べ伝えられたの
は、彼らは肉においては人間としてさ
ばきを受けるが、霊においては神に従
って生きようになるためである。」
(Iペテロ3:18, 19, 4:6)

救い主はまだ十字架にかけられてい
たときに、死後ただちに何をするかに
ついて若干ほのめかされた。救い主は、
悔い改めた犯罪人に「あなたはきょう、
わたしと一緒にパラダイスにいるであ
ろう」(ルカ23:43)と約束された。
これより以前、救い主は死後の霊界に
おける御自身の働きについて予言して
おられた。

「よくよくあなたがたに言うておく。
死んだ人たちが、神の子の声を聞く時
が来る。今すでにきている。そして聞

く人は生きるであろう。

それは、父がご自分のうちに生命を
お持ちになっていると同様に、子にも
また、自分のうちに生命を持つことを
お許しになったからである。

そして子は人の子であるから、子に
さばきを行う権威をお与えになった。」
(ヨハネ5:25-27)

主はこの神権時代の教会の第6代大
管長ジョセフ・F・スミスに、永遠の
中のすべての時のうちで最も重要な日
々であると思われているこの大切な日
に、実際に起こった事柄を明らかにさ
れた。(「福音の教義」第Ⅱ巻、第37
章、『死者の贖い』参照)

「モルモン経」にも、遺体がエルサ
レムの墓に横たえられていたこの7日
目のイエスの働きが幾つか記されてい
る。救い主がアメリカ大陸で生き残っ
ているニーファイ人に闇の中から言葉
をかけられたのは、この日であった。
このとき救い主は彼らに姿を現わさな
かったが、次のように語りかけられ
た。

「見よ、われは神の子イエス・キリ
ストなり。われは天地とそこにある
万物を造れり。われは最初より御父と
共に在りき。而して今、われは御父に
在り、御父はわれにまします、御父は
すでにわれによりてその御名の栄えを
示したまえり。

われは、わが民のところへ降りしが、
わが民はわれを受け容れざりき。すな
わち、われが来ることを示す聖文はす
でに事実となりたり。

われは、およそわれを受け容れたる者にみな神の子となる権能を与えしが、この後わが名を信ずる一切の者にもまたこれと同じ権能を与ふべし。それは、われによりて贖いと救いは来り、またわれによりてモーセの律法は目的を達して効用なきものとなりたればなり。」(Ⅲ ニーフアイ 9 : 15-17)

地上の多くの民の中で、この7日目は自然界の暗黒の一日であった。しかしそれは、歴史上最も栄ある夜明けに先立つ、ほんの短時間の夜の闇にすぎなかった。

第8日(日曜日)

復活は8日目に起こったが、実際の経過日時によると、イエスが前の日曜日にベタニヤを発ってエルサレムに向かってからまる1週間とは経っていなかった。

マグダラのマリヤと「ほかのマリヤ」が救い主の体に塗るための香料を持って、救い主の墓へ来たのは、「一週の初めの日」の「朝早くまだ暗いうち」であった、とヨハネは記録している。(ヨハネ 20 : 1) しかし彼女たちは墓が空になっているのを見た。するとひとりの御使いが彼女たちに、救い主の体がそこにはないわけを説明した。

「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた

暗黒と絶望は、救い主が復活されたことによって、光と喜びに変わった。

場所をごらん下さい。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた……』。(マタイ 28 : 5-7)

そのようにして、暗黒と金曜日の絶望は、救い主が死人の中から復活されたことによって、日中の光と喜びに変わった。そして、肉体の死の縄目は永遠に解かれ、すべての人に死後の生命が保証された。これに比肩できる出来事が歴史中にほかにあるだろうか。

その日が終わる前に、多くの人々が復活の事実を証することができた。なぜなら、復活されたキリストが姿を現わされただけでなく、マタイが記録しているように、そのほかにも復活した人々が現われたからである。「眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。」(マタイ 27 : 52, 53)

モルモン経の民も、これらの証をした。レーマン人サムエルが予言していたように、救い主が東大陸で復活された後、アメリカの多くの聖徒が「よみがえりて多くの人々に現われ、これに

導きと恵みを……」(Ⅲ ニーフアイ 23 : 11) 与えた。

続く数週間内に、復活したキリストは何度か姿を現わされた。マグダラのマリヤとそのほかの女性たちに、またエマオへ向かうふたりの弟子に現われたもうた。ペテロにも現われ、復活した日に10人の使徒たちにも姿を現わされた。さらに復活の翌週(トマスを含む)11名の使徒に現われ、またテベリヤの海岸で7名の弟子に現われたもうた。ガリラヤの山では11名の使徒に、またあるときは500名以上の兄弟たちに、さらに昇天のときに使徒たちに姿を現わされた。モルモン経にも、復活したキリストが現われたもうたことが記されている。キリストは2,500名の人々に、また後にはもっと多くの人々に現われたもうた。

イエス・キリストの復活は、当然のことながら、歴史上最も注意深く記録されるべき出来事のひとつである。なぜなら、それは世界の歴史の中で最も重要な週の仕上げの出来事だからである。

救い主のこの世の生涯における最後の週の主要な出来事を、福音書のうちを含む理由として、使徒ヨハネは次のものを挙げている。「これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」(ヨハネ 20 : 31)



少年そうさく隊

おはなし：メアリー・ジョイス・カプス

え：ラリー・ウィンボーク

つめたい雨の中で、スカウト隊の少年たちにまじって、エディーは司令に耳をかたむけていた。かれのしんぞうは、はやがねのように鳴った。「解散！」の号令のもとに、少年たちは谷へ、林へ、川へと散った。前日の朝、養老院を出たままゆくえ不明になった老人をそうさくするためだ。

隊長の司令はこうだった。「老人はおそらく、すいじゃくしており、コートもくつも無いと思われる。助けを求めることもできずにたおれているかもしれない。このような天候なので、そうさくは急をようする。そこで、われわれは君たちの隊の出勤をようせいした。」

少年たちは、司令どおりただちに行動を開始した。隊員たちは、隊からはなれないよう、たがいにかくにんしながら、そうさくをつづけた。しかし、かん木のしげみや、こしのあたりまである草むらをそうさくしているあいだに、エディーはなかまからはぐれてしまっていることに気づいた。

なかまといっしょにでこぼこ道を歩くのは、苦しくても楽しいものだ。しかし、この仕事はこんなんな仕事である。

右にみぞがあったかと思うと、左にやぶがあり、エディーは両方をそうさくしなければならなかった。あちこちと歩きまわるうちに、ビニールの雨ガッパはあなだらけになり、洋服はつめたい雨にぬれてはだにびったりとくっついていて、足どりはつかれてあやしくなり、両足とも、どろどろになった。長ぐつには、だんごのようにどろがついて、重かった。

エディーはぬれた丸太の上にこしをおろし、ひといきついで、長ぐつのどろをおとすことにした。つかれて、もう何をするのもいやになっていた。しかしそのとき、かれはもう24時間以上この雨の中にいる老人のことを考えた。エディーは自分のことばかり考えていたことがはずかしくなり、はやく老人をさがし出そうと、こしをあげた。そうすれば、自分も家へ帰ってあたたまり、服をかわかすことができるのだ。

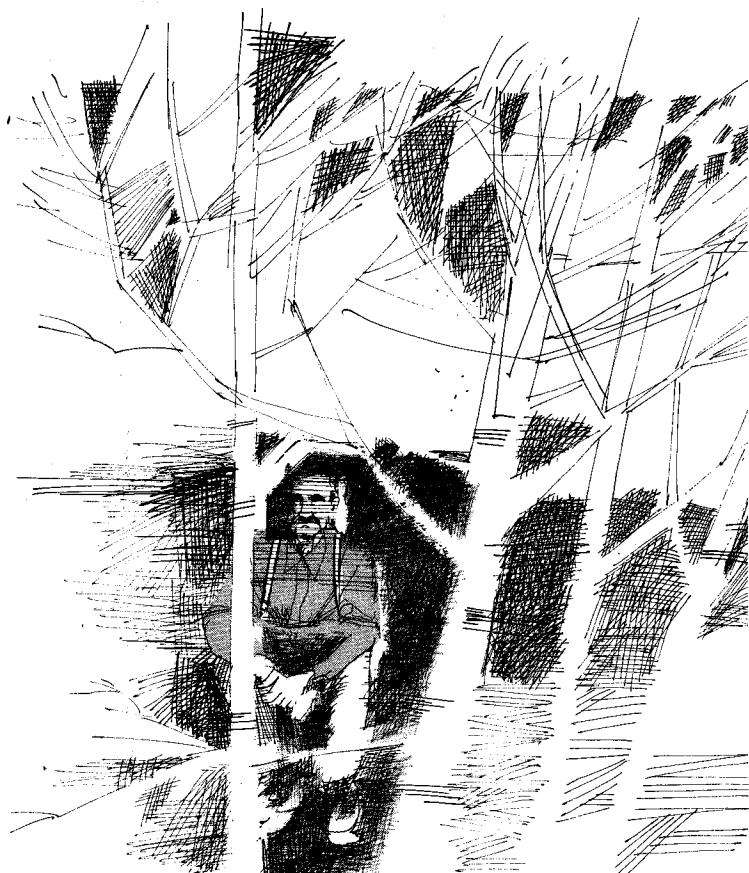
「さっきの川ぞいのところはよくさがさなかったな。いばらがしげっていたし、ぬかるみだったし……」 エディーは考えた。もしかしたら雨の中にたおれている老人を見すごしてきたかもしれない。そう思うと、せすじが寒くなった。



エディーはリュックサックをせおいなおし、木の枝をつえにし、小川ぞいのつるつるすべる岩の道をひきかえした。どろがいはいついた長ぐつは、石ころ道にとられて歩きにくく、足がつかれていたかったが、くつが足首をしっかりと保護してくれることだけでも感謝した。老人はちゃんとしたくつをはいているだろうか、スリッパだけで養老院からまよい出てしまったのではないだろうか。

少年たちはみな、この雨ではだめだ、と考えたにちがいがなかった。かどをまがったとき、エディーは何か赤いものを目にした。しんそうははげしく鳴った。

川を見おろすと、男の人が対岸の岩だなのかげにちちこまっていたのだ。エディーは、とっさに助けをよぼうとした。しかし、もしびっくりさせたら、岩かげにいる男の人は、川



へ落ちてけがをするかもしれないし、にげようとするかもしれない。

そのとき、エディーは隊でならったフクロウの鳴き声を思い出した。ホー、ホー、ホーと3回合図を送れば、なかまのスカウトが来ることになっていた。

つるつるすべる土手をのぼり、100メートルほどひきかえしてから、エディーは合図を送った。2度合図を送ったが返事はなかった。しかし耳をすませていると、「ホー」という合図がかすかに聞こえた。そこでエディーは老人の見えるところへひきかえし、なかまたちに場所を知らせるために、小さな声で合図をくりかえした。

老人はよろよろと立ちあがろうとしたが、またこしをおろして、フクロウの鳴き声に耳を傾けた。

しばらくすると、服をどろだらけにしたスカウト隊員がひとり、谷間にすがたをあらわした。しずかにするようにと合図すると、エディーはいそいで坂をおり、老人を見つけたこ

とを説明した。

「はやく助けなくちゃ。でも、おじいさんに聞こえないところに行ってからでなくちゃ、大声をたてちゃだめだよ。おじいさんがびっくりしないように気をつけなきゃ。そうしないと、にげようとするかもしれないから」とエディーは言った。

エディーはまたひとりになった。「よし、さがしに来たことを気づかれないようにしなくちゃ。」かれは川をわたって老人のほうへ歩いていった。口ぶえをふき、あさをびちゃびちゃと歩いていき、岩だなのかげにすわっているその老人を見て、さもおどろいたように立ちどまって声をかけた。「やあ、おじいさん。道にまよったんですか。おべんとうがありますから、いっしょに食べませんか。」

エディーがリュックサックからサンドイッチと魔法びんを取り出すと、老人の目からきょうふは消え、信らいがよみがえった。しかし老人は、まだ口をきこうとせず、無言でふるえる手をさし出し、食物とミルクを受けとった。エディーはリュックサックから毛布を取り出し、すいじゃくしている老人のかたにかけてあげた。

エディーは、ほんのちょっとのところ、このかわいそうな老人を見すごしてしまうところだったと考えると、胸がいっぱいになって、食物はたくさんあったが、サンドイッチ半分ものどを通らなかった。

「散歩をしていたら道にまよってしまって……。」サンドイッチを食べてしまうと老人は言った。そして毛布にくるまると、つかれた子供のようにねむってしまった。

ふとエディーが顔をあげると、もうまわりにはほかの隊員たちが来ていた。しばらくして養老院の人たちがとう着し、老人をたんかで運んで行った。エディーはほっとためいきをついた。

まだ雨はやまず、体はつかれ服はぬれて寒かったが、心は晴れわたった空のように、明るくあたたかかった。

さいしょ ふっかつ さい
最初の復活祭

マタイ伝 26, 27章

マルコ伝 14, 15章

ルカ伝 22, 23章

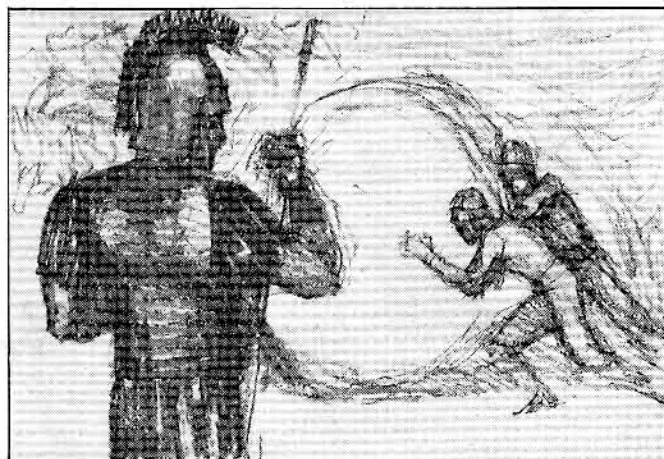
ヨハネ伝 18, 19章



1. 悪い人たちがゲッセマネの園にやってきて、イエスさまをつれて行ってしまいました。



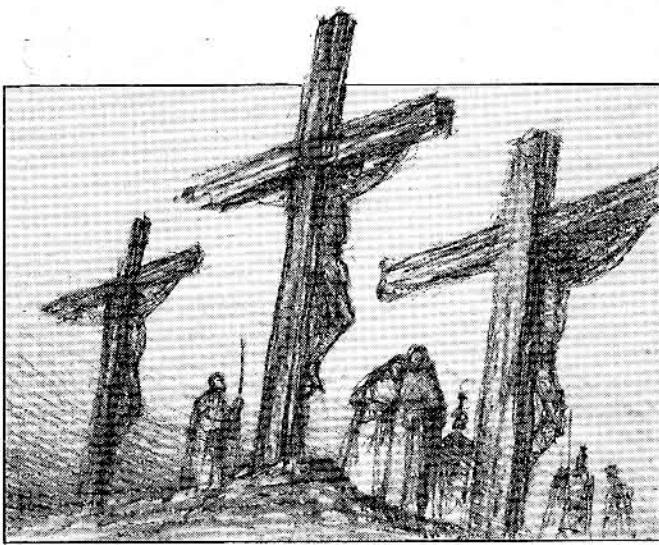
4. 弟子たちは、イエスさまのなきがらを近くの園にある墓に運んでおさめました。



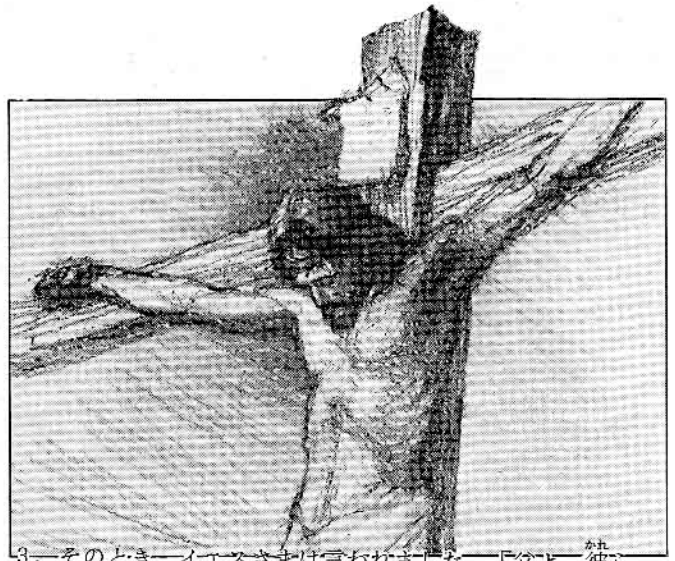
5. イエスさまをはりつけにして殺した人たちは、その墓の入口を大きな石でふさぎ、番兵に見はりをさせました。



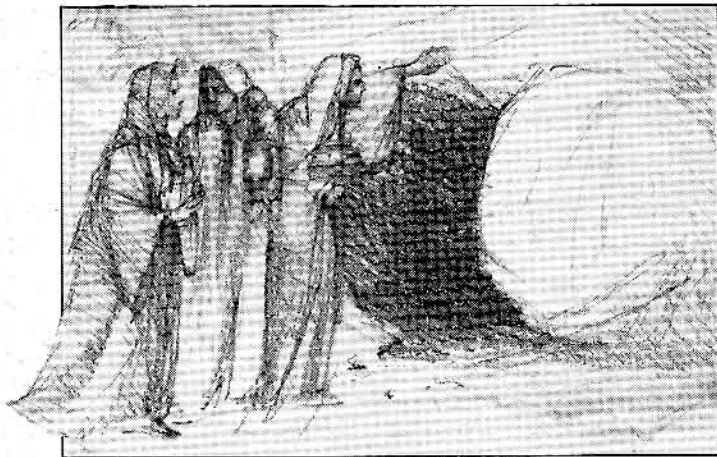
8. その知らせを伝えてから、マグダラのマリヤは墓にもどってきました。マリヤが墓の外に立って泣いていると、イエスさまがあらわれました。その後イエスさまはたくさんの人々にも現われました。



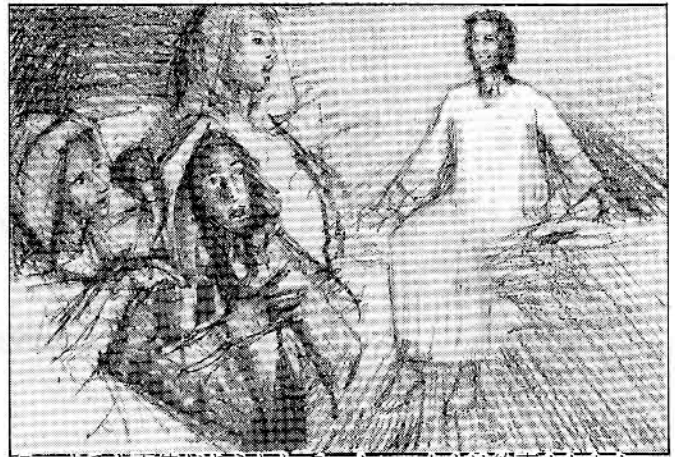
2. 悪い人たちは、イエスさまをカルバリというところにつれて行きました。そしてふたりのどろぼうの間に、イエスさまをはりつけにしました。



3. そのとき、イエスさまは言われました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」それから「すべてが終わった」と言われ、首をたれて息をひきとられました。



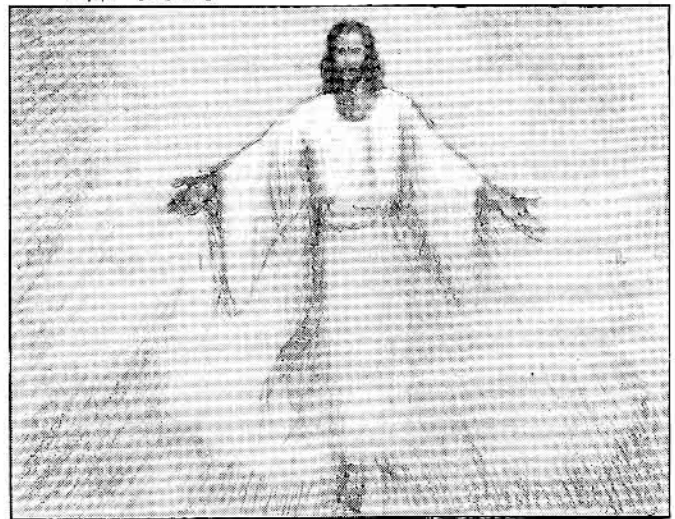
6. 安息日の次の日、いく人かの女の人たちが墓を見にやってきました。みんなは、番兵もいなければ、あの大きな石もころがされているのに気づきました。



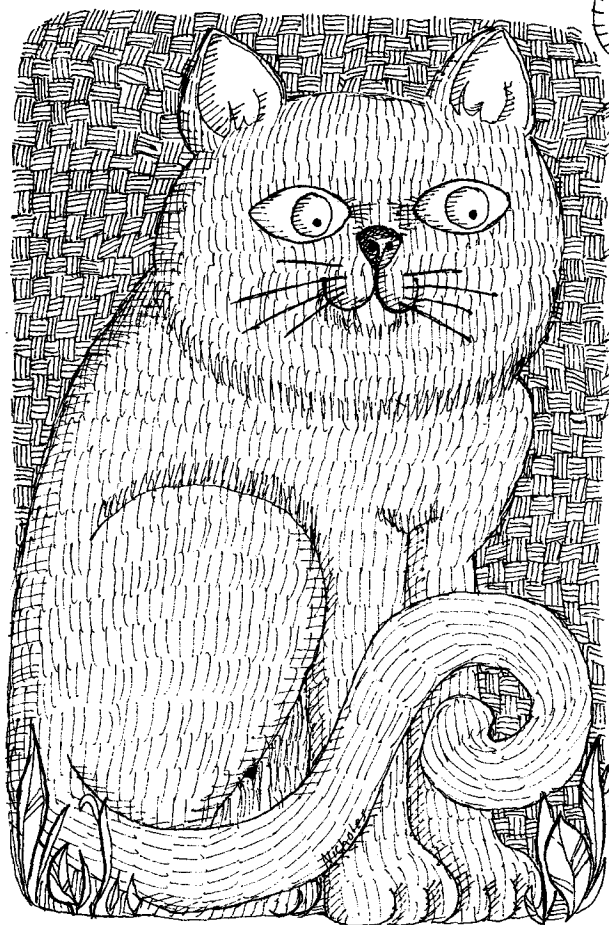
7. すろど天使があらわれて、イエスさまは約束されたとおり、死からよみがえられたと言いました。そして、弟子たちのところへ行って、そのことを伝えるようにと言いました。



9. イエスさまは弟子たちのところにこられて、40日間いっしょにすごされました。そして教えを説き、やまいをいやされました。



10. ある日弟子たちが見ている前で、イエスさまは天に上げられました。そのときふたりの天使が大声で言いました。「あなたがたをはなれて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じありさまで、またおいでになるであろう」



ベティー・ハブカ（民話より）

むかしむかし、ねことねずみはとってもなかよしだったんだ。2ひきはなかよくうつくしいしみにすんでいたんだ。そこにはねこがたべることりもたくさんいたし、ねずみのごちそうのマニオクのねっこもたくさんあったんだ。

でも、あるとき、ねこがもんくをいったんだ。「こんなしま、あきあきしちゃった。たべるものといったら、ことりしかいないんだもの」ってね。

するとねずみがこういったんだ。「じゃあ、うみをわたって、むこうぎしにいこうよ。そしてむらへいって、すみごちのいいおうちをみつけよう。そこでは、えさをさがしたりとったりしなくてもいいんだよ。」

「それはいい、でもどうやってうみをわたるのさ」ってねこがきくと、ねずみは、

「マニオクのねっこでボートとかいをつくろう」っていったんだ。

2ひきはおおきなマニオクのねっこをさがしてきて、まんなかをくりぬいてボートをつくった。そうして、ボートをうみへこぎだしたんだ。

でも、おもったよりきしべはとおくて、なんにもたべものをもってこなかったものだから、2ひきはつかれて、おなかがすいちゃったんだ。

「あーあ、ちょっとでいいからたべものがあつたらなあ。おなかがすいて、ふらふらだよ」ってねこがいうと、ねずみが、

「こぐのはやめて、ねむろうよ。きっと、じかんははやくたつよ。めがさめるころにはきしにながれついているかもしれないよ」っていったのさ。

「それはめいあんだ」って、ねこもさんせいして、ボートのうしろのほうで、ねむっちゃったんだ。

ねずみも、よこになったんだけど、だんだんおなかがすいてきて、ちっともねむれなかったのさ。そのとき、ねずみはボートがマニオクのねっこでできていて、とてもおいしいことをおもいだしたんだ。

ちょっとだけたべちゃおう、ねずみはそうおもってボートのそこをかじりはじめたんだ。

ねこは、がりがりっていうおとをきいて、めをさまし、「なんだろう」って、あたりをみまわしたんだ。

でも、ねずみは、かじるのをやめて、ねむっているふりをしたから、みつからなかった。

「きっと、ゆめだったんだ。」もうなんにもきこえなかったから、ねこはそうおもって、またねむっちゃった。

ねこがねむると、ねずみはまたボートのそこをかじりはじめたんだ。すると、ねこはまためをさましてあたりをみまわ



したけど、ねずみも、またねむっているふりをしたからみつからなかったんだ。ねこは、またゆめだとおもって、ねむっちゃった。

でも、ねこがねむっちゃってから、またねずみがボートのそこをかじりだすと、とつぜん、そこからみずがあがってきた。ねずみのやつ、とうとうボートのそこにあなをあけちゃったのさ。

ねこがめをさますと、ボートはみずでいっぱいだった。

「たすけて—— おぼれるよ——」

ねずみのやつがボートのそこにあなをあけた、そうわかると、ねこはおこっちゃったんだ。

2ひきはうみにとびこんで、いっしょうけんめいおよいだ。

「きしについたら、おまえをたべてやるからな。」ねこはおこってそういった。

とうとう2ひきはきしにおよぎついた。

ねずみは、こわくてどうしようかとかんがえたすえ、いいことをおもいついたんだ。

「まだたべないでくれよ、ぼくのからだがかわくまでまってくれないかなあ。それまでにはきみのからだもかわくよ」って、ねずみはいったのさ。

ねこはぬれたのがきらいだったから、そうすることにしたんだ。ねこはぬれたからだをなめているうちに、じぶんのからだをきれいにすることにむちゅうになっちゃって、ねずみがあなをほっているのにきがつかなかった。

2ひきとも、すっかりからだがかわいてしまうと、ねこはニャーオってなきながら「さあ、おまえをたべてしまうぞ」って、ねずみにとびかかったとたん、ねずみはすばやくあな

にはいってしまったんだ。

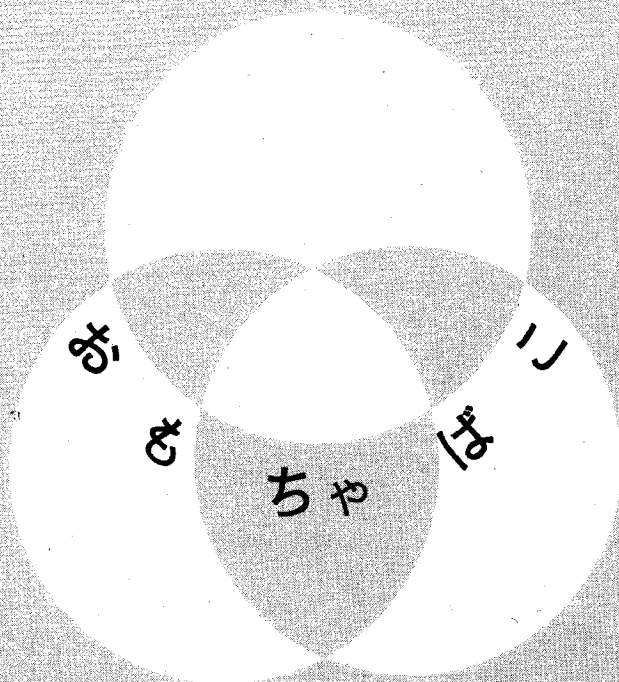
ねこは、あなのなかのねずみにてがとどかなかったものだから、あなのそばにすわってまつことにしたんだ。

「いつかはでてくるにきまっているさ。」ねこはそうおもったわけだ。

でも、ねずみはもっとふかくあなをほりはじめたんだ。そして、どんどん、どんどんきのしたをほって、とうとうはんたいがわにでてきた。そうしてねずみは、さっさとちかくのむらにおうちをみつけちゃったのさ。

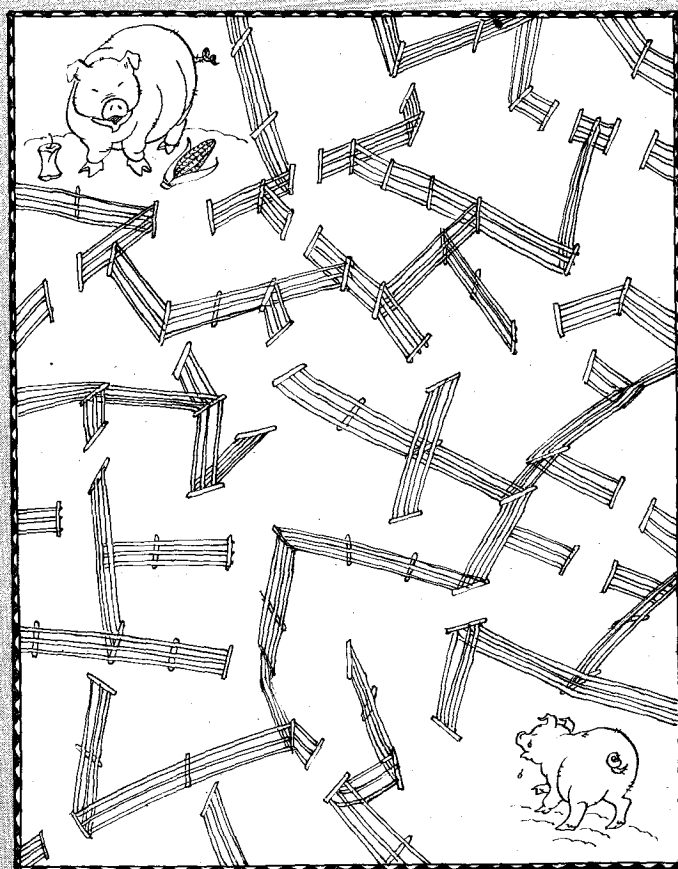
ねこはねずみがきのはんたいがわからにげていったのにきがつかなかったんだ。だから、ずうっとねずみのやつがでてくるのをまっていたんだけど、そんなはずはなかったのさ。

それからというもの、ねこはねずみががりがりとおとをたてるとすぐにめをさますようになったんだ。それに、ねずみも、あなのそばにねこがすわっていないかと、いつもびくびくするようになったんだってさ。



こぶたがお母さんのところへ帰れる道
をさがしてあげましょう！

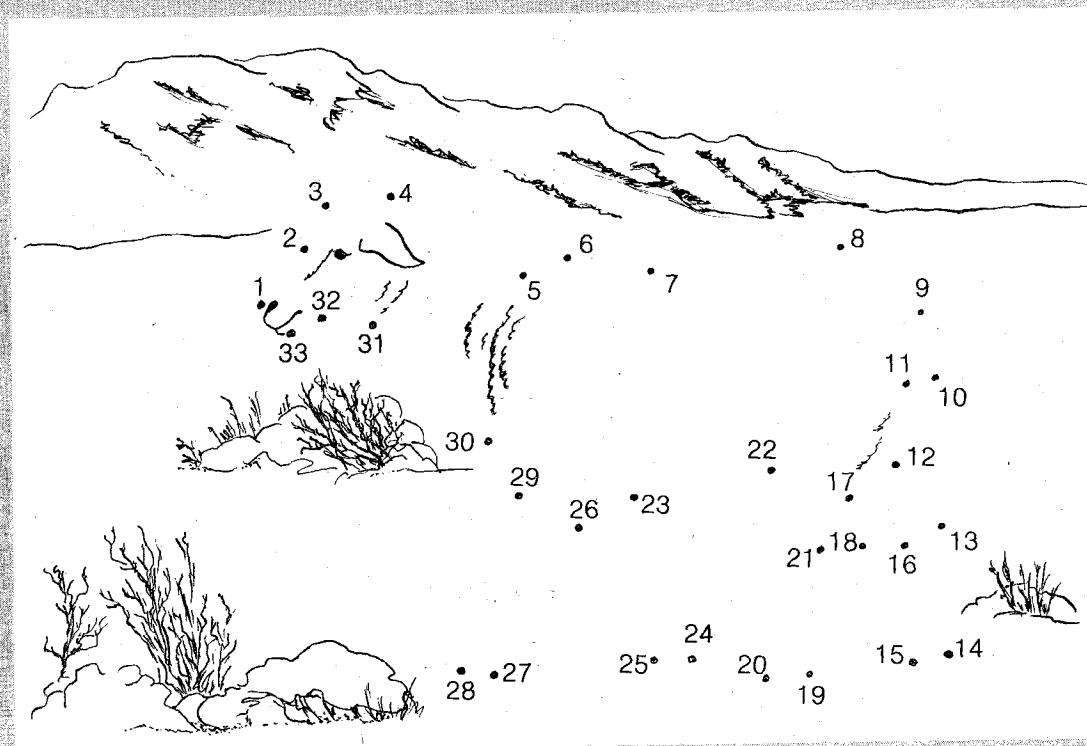
アン・スタセイ



わたしは何でしょう？

1から33までの
てんをむすんで
みましょう

キャロル・コナー



黄色いお皿

「あっ、いけない!」

母お気に入りの大きな黄色のお皿が床に落ちて、粉微塵に割れてしまいました。私は泣きたい気持ちでいっぱいでした。お皿は非常に高価で、たやすく手に入れることができないものだったのです。母はいつも黄色のお皿で粉をこねて、おいしいクッキーやドーナツ、プリン、キャンデーなどを作ってくれました。でもお皿が割れてしまった今、これから母は何で作るのでしょうか。

その日の皿ふきはちょうど私の番で、私は充分気をつけてふいているつもりでした。ところがどういいうわけか手がすべって、お皿を床に落としてしまったのです。割れたお皿のかけらを片付けてしまわないうちに、母がやって来ました。これからどんなことが起きるのか、私には見当もつきませんでした。母は私を叱りつけるのでしょうか。それともわめきちらすのでしょうか。

でも、母は何も言いませんでした。母持ち前の性格とでも言うのか、いつものように落ち着いた雰囲気です。接してくれました。今となっては、母にとってお皿のことなどどうでもよかったのです。母が心配していたのは、私自身のことでした。ただお皿を割ってしまったというほんの些細なことで、私の心がひどく傷つけられはしなかっただろうか。

大きな黄色いお皿、それはそれはすてきなものでした。でも、理解ある母親を持つことは何とすばらしいことでしょう。

カイ・ライマン・ビショップ



「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」(黙示21:7)

聖典は古今を問わず、誘惑が神から来るものではなく、サタンまたは自分自身の欲望や弱点から来るものであることを教えている。

「だれでも誘惑に会う場合、『この誘惑は、神からきたものだ』と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもある。人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。」(ヤコブ1:13-15)

モルモン経にはこう記されている。

「このような悪事が国民の中に起ったのは、すなわちサタンが民の心を煽動してあらゆる悪事をさせ、……民は……悪魔の意のままにここかしこへ誘われ、悪魔の望む悪事は何事でもこれを行い……」(Ⅲニーファイ6:15-17)

イエスでさえも様々な誘惑を受けられた。アルマはこのように予言した。

「この男の子は世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みを受けたもう。これは、この方が自分でその民の苦しみと病いとを引き受けると言いたもう言葉が成就するためである。」(アルマ7:11)

また天使はベンジャミン王に、イエスは「誘惑を受け、肉体上の苦痛と飢えと渇きと疲労とを経験したもうが、これは死ななければ人間に堪え難いほどひどいものである」と言っている。(モーサヤ3:7)

聖書の中に、イエスは「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」と記されている。(ヘブル4:15) またアビナダイは、イエスが「誘惑に逢ってもこれに負けず……」と言っている。(モーサヤ15:5) ジョセフ・スミスの受けた啓示の中に、イエスは「誘惑を受けたまいしがこれを心に留めたまわず……」とある。(教義と聖約20:22)

主は私たちを誘惑の力から救う方法を御存知である。しかし悪魔は私たちをそそのかし、誘惑する大きな力を持ってい

る。私たちは、その力から逃れる方法を知らなくてはならない。

聖典に、イエスは「虚弱の度に応じてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう」と記されている。(アルマ7:12)

ペテロは「主は、信心深い者を試練の中から救い出し、…ことをよくご存じなのである」と言っている。(Ⅱペテロ2:9) またこの末日に、主は「人々の弱きを知り、誘惑に陥る者を救う方法を知る」と言っておられる。(教義と聖約62:1)

以下にあげるのは、主が私たちをサタンの誘惑から守るために備えられた方法である。

聖典にはこう記されている。「そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。」(ヤコブ4:7) イエスが誘惑に立ち向かった時、サタンはイエスのもとを去った。

最初サタンはあざけりながらイエスに言った。「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください。」イエスに簡単にはねつけられたサタンは、別の誘惑をしかけた。「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんください。……」再度イエスにはねつけられたサタンは、「この世のすべての国々とその栄華とを見せ」必死の思いでイエスに言った。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう。」しかし再びイエスにはねつけられて「悪魔はイエスを離れ去」った。(マタイ4:3-11参照)

それゆえ聖典にもあるように、「試練を耐え忍ぶ人は、さしいわい」なのである。同様に、アルマも「主イエス・キリストを信じる信仰を以て悪魔の誘惑をことごとくうち破る」よう人々に教えている。(アルマ37:33)

祈りは誘惑の力を退ける。イエスは言われた。「……汝らは悪魔に誘いまどわされてそのとりことならぬよう、たえず目を覚して祈らざるべからず。……そはサタンが汝らを支配して麦のごとくにふるわんと欲すればなり。」(Ⅲニーファイ

誘惑を避け、誘惑を拒み、誘惑に打ち勝つよう助けを祈り求めること。

ロバート・J・マシューズ

18：15, 18)

またモロナイはこう勧告している。

「この試しの生涯の間賢くせよ。自分の身からあらゆる汚れを払い去れ。……むしろ何の誘惑にも負けずに生ける真の神に仕えろと言う固い決心をもって願い求めよ。」(モルモン9：28)

アルマもまた言っている。「私はあなたたちが悪魔の誘惑になびかないよう、悪魔にうち勝たれないよう……注意してたえず祈るようにすすめる。……悪魔はあなたたちに善い報いは与えない。」(アルマ34：39)

しかしながら中には助けを受け入れず、「誘惑に負けないようにたえず毎日神に祈り願えと言う教会の規則に従わ」ない者もいる。(アルマ31：10)

これらに加えて、主はご自分の聖徒たちをかばう方法も備えておられる。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(Iコリント10：13)

「……主の御前にへりくだり、その聖い御名を呼び、自分に堪えられない誘惑に会わないようたえず目を覚して祈り、これによって聖霊の導きを得るように……」(アルマ13：28)

慈愛あふれる父は私たちの過ちを懲らしめられる。それにより私たちは赦され、祝福を受けるのである。「誠にかくの如く、主わが愛する汝らに言う。汝らの罪赦されんために、愛する汝らをまた懲しむるなり。そは、懲しめとともに汝らがすべてに於て誘惑より免る様われ一つの途を備うる故にして……」(教義と聖約95：1)

「あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子があるだろうか。すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。」(ヘブル12：7, 11)

忠実な者たちに対して、主はこのように言っておられる。

「忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。」(黙示3：10)

パウロははっきりこう言っている。「悪に負けてはいけない。かえって善をもって悪に勝ちなさい。」(ローマ12：21)

このように、主の戒めに従順であり主のしもべたちの懲らしめを進んで受けることにより、人は「誘惑の時来らむといえども汝らの墮落せざる様贖いの日まで結び固むる約束の聖き『みたま』を保持」するのである。(教義と聖約124：124)

聖典は私たちに、誘惑を克服するために互いに助け合うように勧めている。イエスはペテロに言われた。「……見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくなるように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直った時には、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22：31, 32)

またパウロは罪人たちに同情して言っている。「兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい。互いに重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう。」(ガラテヤ6：1, 2)

「わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない……キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ『あなたをそしる者のそしりがわたしに降りかかった』と書いてあるとおりであった。」(ローマ15：1, 3)

「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないことを……万事について教え示したのである。」(使徒20：35)

イエスが私たちを助けて下さったように、私たちも互いに助け合うべきである。私たちは誘惑にどのように立ち向うべきだろうか。まず誘惑を退け、キリストの愛によってそれを克服できるよう神の助けを祈り求めることである。

ヒーバー・C・キンボール

「逸話集，近代の使徒の生涯より」

今回を皮切りに，図書紹介シリーズを掲載できることを喜ばしく思います。そしてこれが読者のお役に立つよう希望しています。英語国民には教会関係の図書が多く手に入りますが，他国語への翻訳は費用がかさむことなどもあり，行なわれていませんでした。このたび教会統一機関紙では出版者および著者の許可を得て，数冊の図書を連載の形で皆様にお届けすることとなり，霊的のためになる図書，多くの読者に役立つ図書を選定しました。

シリーズの第1回は，レオン・ハートション著「逸話集，近代の使徒の生涯より」*です。ハートション兄弟は，この福音の神権時代の大勢の使徒の生活から霊的なトピックを選んでまとめ上げました。物語は，生きた福音の原則を見せてくれるだけでなく，教会歴史に対する理解も深めてくれます。これらの図書の転載を許可されたデゼルト出版社およびハートション兄弟に感謝申し上げ，読者の御期待を乞います。

編集主幹

ラリー・ヒラー

略 歴

キンボール長老は1801年6月16日，合衆国バーモント州シェルドンで，ソロモン・キンボール，アンナ・スポールディングの息子として誕生。

1831年秋，モルモンの宣教師に初めて会う。1832年4月バプテスマを受ける。

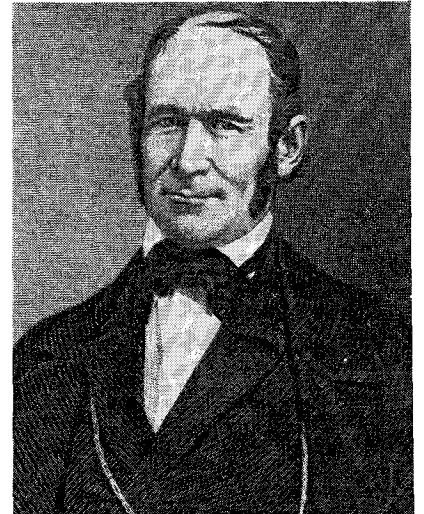
1835年，使徒に召され，この神権時代最初の十二使徒定員会の一員となる。

1835年カナダおよびニューイングランドに宣教師として伝道。1837年英国伝道開始の任に召される。1年足らずの伝道期間に1,500名の教会員が誕生。

1840年，他の十二使徒と共に英国に再度渡る。

1847年，初代開拓者のひとりとしてソルトレーク盆地に入植。

1847年，ブリガム・ヤング大管長の第一副管長に支持され，1868年6月22



日，67歳で死去するまで終生その責任にあった。

ヒーバー・チェイス・キンボールは模範の人であった。彼は偉大な予言の賜を持ち，末日聖徒から深く愛された。

ヒーバー・C・キンボールのように愛され，敬われた者は，教会歴史中にもまれである。彼は恐れを知らぬ人であった。その高潔さと主イエス・キリストに対する全き献身に，疑いをはさむ者はない。

*レオン・R・ハートション編

「逸話集，近代の使徒の生涯より」

(*Exceptional Stories from the Lives of Our Apostles*)

ソルトレークシチー，デゼルト出版社，1973年。

「幼な子の信仰」

1834年から翌年にかけての冬、カートランドに神学講座が創立された。ここでは、ひとりを選んで他の人を啓発する話をさせるのが慣例であった。あるときヒーバー・C・キンボールが指名され、信仰について話すことになった。彼は最近家庭に起きた出来事から話を始めた。

「ある日、私の妻が外出するときに、娘のヘレン・マーに、皿に手を触れないように言いつけました。」その皿は珍品で値段も高く、買い足しができなかったのである。キンボール姉妹は娘に、もし留守中に割ったりしたら帰ってから罰を与えると言いわたした。キンボール兄弟はこう続けている。「妻の外出中に、娘は折り下げ式テーブルのたれ板をおろしてしまい、何枚もの皿を割ってしまいました。……」

少女はひどくおびえて、リンゴの木の下に行き、母親の心が和らいで、帰ってきてもお尻をおたないようにと祈った。キンボール兄弟はこう語った。「娘の母は非常に厳格な人で、子供にこうと約束したら必ずそれを守る人でした。外出から戻ると、約束通り娘を罰しようとしていました。彼女は(娘と)一緒に自分の部屋に入って行きましたが、娘をせっかんする気力がなく、心が和らいで、子供に向かって手を振り上げることがどうしてもできませんでした。あとでヘレンは母親に、主に祈ったことを話しました。」

ヒーバー兄弟は淡々と話してきて、一息置いた。聞く人たちの目には涙が光っていた。心のやさしい予言者ジョセフも泣いていた。予言者は兄弟たちに、これこそが自分たちに必要な信仰であり、「身を低くして親の前に行き、心の願いを打ち明ける幼な子の信仰」であると語った。彼はキンボール兄弟をほめ、「この話は時宜を得ている」と言った。

「大粒の涙が頬を伝った」

1837年6月4日の日曜日、(以下はヒーバー・C・キンボールの記述による)私はカートランド神殿のメルケゼデクの壇にある聖餐テーブルの上方の座席に座っていた。すると予言者ジョセフがやってきて私に小声で言った。「ヒーバー兄弟、主のみたまが私にささやきました。『我がしもべヒーバーを英国に行かせ、我が福音を宣べ、かの国に救いの扉を開かせよ……』と。」

私はそのような召しに就くには弱すぎると感じて、ブリガム兄弟の同行を予言者に願った。しかし、ブリガム兄弟には別にすることがあるのでここに留まるとの返事であった。このような召しは、考えるだけでも自分の身に余るものだった。私は召しの重みに今にも押しつぶされんばかりだった。

しかし、あれこれ思い悩んだところで、責任の道をはずれることはできない。私は天父のみこころを理解したが早いかな、神が全能の力をもって私を支え、必要な資格をすべて授けて下さる

と信じ、いかなる障害をも乗り越えて進み行こうと決意を固めたのである。家族に心は残る。貧困なままに残していかなければならないだろう。しかし真理という大義、キリストの福音は、他のあらゆる斟酌を超えて重要だと思ったのである。……

大管長会が私に手を按いて伝道部の管理者に任命し、頭に偉大な祝福を授けた。それは、かの国で人々をみもとに集める力を神が与えたまい、天使が私と共にいて私を支え、私の足は決してつまずくことなく、強大な恵みを受けて英国のみならずアメリカにおいても、幾千の人々に救いの源を証だてるという祝福だった。

この務めに召されてから、私は毎日神殿の最上階にある東の部屋に行き、心の奥底を開いて主のみ守りと、主のしもべに任命された召しを立派に務め上げることのできる力とを請い願った。……

(1837年6月13日火曜日、出発の日がきた。ロバート・B・トンプソン長老はヒーバー家族の荘重な別れの光景を、愛情こめて生き生きと描写している。以下は彼の筆による。)

長老たちの英国への出立日と予定されていた日がやってきた。私はそのシーズンをカナダで働くつもりで200～300マイル(300～500キロ)を同行しようと、出発の日取りを確かめにキンボール兄弟の家へ行った。

ドアが少し開いていて、中に入ると眼中に飛び込んできた情景に心打たれる気持がした。私は邪魔だと考えて遠慮するところだったが、その場に釘づ

けになったように体は動かなかった。父親が「高きに続べたもう神」に心の思いを赤裸々に訴え、自分が荒海を順調に航海できるよう、またどこに行くことになっても良い働きができるよう、そして「つばめに巣を与え、鳴く小がらすに食物を与えたもう」神が、留守中妻子に必要なものを与えたもうようにと祈っていたのだ。それから彼は祝福師のように、自分の職に基づいて家族ひとりびとりの頭に手を置き、父親の祝福を施し、自分が異国で福音伝道に携わる間、家族を神の保護に委ねた。こうしている間に彼の声はみんなのすすり泣きに消されてしまった。だれもがそれを止めようとしたが、無駄だった。彼らにとっては、長い間自分たちの保護者である父と離ればなれになることが実に悲しかったのだ。父親は先を続けた。しかし胸に家族への思いがこみ上げてきて、もう普通に話せなかった。万感胸に迫り、言葉はとぎれとぎれになり、大粒の涙が頬を伝った。その涙が彼の胸の内を如実に物語っていた。私も感情を押さえ切れずに、家族と一緒に我れ知らず泣いていた。同時に、私はこのような情景を目撃できた特権を感謝した。あのように愛する家族から、彼を慕う妻や子供たちから彼を離すことのできるのは、神への愛と義務感と神の大義への忠誠以外にないことを、私は悟ったのである。

「どうか、私にバプテスマを受けさせて下さい」

(キンボール長老の英国伝道中の出来事である。)

「羊はその声を知っているのだから、彼について行く。ほかの人にはついて行かないで逃げ去る。」

これを証明するすばらしい出来事がヒーバー長老の伝道中に起きた。彼は次のように書いている。

私がダウナムとチャトバーンに行くつもりだと数人の兄弟に話すと、彼らは成功の見込みは全くないので行かない方がよいと忠告した。別の宗派の聖職者が何人もその町に教会を建てようとしたが、人々に何度説教しても成果はなく、手を尽くしてもことごとく反抗され、不成功に終わっていたのである。ここ30年どんな宗派の働きかけも抵抗にあって、聖職者たちはすべての試みが徒労に帰すのを見て、かたくなな人々だと見限ったという話だった。私もその村がひどい不信者の村だと聞いていた。しかしそう聞いたところで、人の福音が失敗したとしてもイエス・キリストの福音なら彼らの心をつかむことができると信じて、気持は動かなかった。私はその兄弟たちに、義人ではなく罪人を悔い改めさせることが自分の務めなのだから、その町へ行きたいと言った。

翌日、チャトバーンで説教をしてほしいという非常に熱心な招待が届いた。その晩はクリテロで説教する約束

があったので、招待に応じられない旨を伝えたが、チャトバーンの人々はそれに満足せず、遂には彼らに同行すると言わざるを得ない状態になってしまった。約束したクリテロにはフィールディング長老に出向いてもらうことにした。……

チャトバーンで、私は住民の暖かい出迎えを受けた。あとで彼らは大勢私の説教を聞きに来てくれた。昔什分の一税の穀物を貯蔵した大きな納屋を用意して、中央に私が立つための樽を置いてくれていた。私は彼らに福音の第一原則を説き、救い主イエス・キリストの啓示された原則と、罪の世が赦しを受けるための条件について、また真理を受け入れた人の特権と祝福について簡単に話した。それから復活についても少し話をした。私の証には主のみたまが伴い、喜んで受け入れられた。かたくなで頑固だとされていた住人たちの心は和らぎ、愛と親切に満ちていた。私は、自分は主イエス・キリストのしもべでいつでも福音の儀式を執行する用意があると話し、バプテスマの準備に必要な事柄を説明した。つまり、悔い改めて罪を捨てようと感じたら、獄吏とその家族やコルネリオと彼の家にいた人々のように罪の赦しのバプテスマを受ける用意が整うことを説明した。話を終えると、だれかが私の上衣を引っ張るのに気づき、……振り向いて用向きを尋ねた。エリザベス・パーティントン夫人が言った。「どうか、私にバプテスマを受けさせて下さい。」「私も」「私も」と大勢の声が叫んだ。そこで私は水の中に下り立ち、25名に



バプテスマを施した。バプテスマと確認の儀式と、彼らとの話合いは真夜中を過ぎるまで続いた。

翌朝になり、私はダウナムへ戻って一日がかりで25名から30名ほどの人にバプテスマを施した。

その次の晩はチャトバーンへ引き返した。会衆が非常に多くて野外で説教しなくてはならなくなり、私は石壁の上に立った。その後数人にバプテスマを授けた。チャトバーンの村々は隅々まで影響が及んだと見え、親は子供を呼び集めて私の説教したことを話して聞かせ、神の御名をみだりに使うことやいろいろな悪い習慣を戒め、なすべきことを教えていた。

私たちはプレストンを5日間留守にしたが、その間にフィールディング兄弟と私は110名ほどのバプテスマと確認を行ない、ダウナムとチャトバーンとワディントンとクリテロに支部を組織し、幾人かを小神権に聖任し、管理させた。これは、村人がアメリカ人を見、私たちの声に耳を傾けた最初のことである。

是非とも書かなくてはならないことがある。それは、フィールディング兄弟と私がチャトバーン村を通してダウナムへ行く途中の出来事である。私たちが村に近づくのを見ると、知らせが家から家に伝わり、途端にはた織機（オリ）の音が止まって玄関に人が群がり、私たちを歓迎し、見送ってくれたのである。村の若者が40人以上出迎えに走ってきた。ある者は私たちのマントをつかみ、互いに手を握りあった。手をつないだ若者たちは私たちの前をシオン

の歌を歌いながら歩いた。親たちは嬉しそうにその様子を見ていて、私たちに祝福を送り、真理の原則と救いの計画を教えに私たちを遣わされた天の神をほめたたえた。子供たちは私たちと一緒に、1キロ半離れたダウナムまで歩いた。このような光景、このような感謝を私はこれまで見たことがなかった。私は心に叫んだ。「確かに『幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた』のだ」と。全能の神への感謝をこのような形で見ることが、何にも勝る喜びではなからうか。しかも心がかたくなで福音を聞くはずがないと思われ、この地方一番の罪深い頑固な民だとされていた村人たちから。

「合衆国物資」

1848年はソルトレーク盆地がイナゴの被害に遭った年である。作物を荒らす害虫の大群が、飢饉と絶望の旗印をかかげて山腹より黒々と飛来し、青々とした穀物畑を襲った。なよやかな穂は彼らの貪慾さにかかってひとたまりもなかった。イナゴはそれこそすべてを食い尽くしていった。この破壊者と共に、飢餓が哀れな入植者たちの眼前に立ちはだかった。

しかし、彼らは奇跡によって救われた。この惨害のさなか、食い止めるすべもないと思われたとき、突然カモメの大群が現われたのである。……カモメは飛来して破壊者を餌食にした。1日中、イナゴを腹に詰め込んではいっ

ぱいになると吐き出し、また詰め込んだ。……

それでも欠乏していた。盆地での初収穫の残りは、辺境やヨーロッパからやって来始めた移民の必要量をかろうじて確保するだけで、カモメに助けられはしてもイナゴによる被害で、飢えの恐れが出てきた。……

半ば飢えて服も満足にない移民が、あすのパンと身を被う衣服をどこに求めてよいかわからずにいるとき、この時は小麦粉と衣料が欠乏していたのだが、ヒーバー・C・キンボールが予言のみたまに満たされ、公の集会で啞然とする会衆を前に語った。すぐにも「合衆国物資」がニューヨークよりも安くグレートソルトレークシチーの街角で売られ、人々は食糧や衣料がふんだんに買えると。

「とても、そんなことがあるはずはない」とチャールズ・C・リッチは言ったが、それは驚くべき宣言を聞いた大方の人の気持を代弁したものであった。

みたまの力が退いた途端、ヒーバー自身も自分の言葉に驚き、「肉欲の人」が頭をもたげた。彼は席にすわると幹部の兄弟たちに、「間違った予言をしたのではないかと心配だ」と話している。しかし、その予言の言葉はヒーバーの言葉ではなかった。靈感を与えた神は、それがどう実現するかを知っておられたのである。

この驚くべき予言は、金鉱目あてにカリフォルニアへ向かう途中の男たちの思いがけない来訪で成就された。カリフォルニアの金鉱発見は、まるで文

明社会をひっくりかえしたようだった。荷を山と積んだ幌馬車があとからあとから、アメリカ大陸を金鉱めざして進んだ。ソルトレーク盆地は合衆国の休憩場となり、聖徒たちがヒーバーのあのように大胆な予言の驚きから我を取り戻す暇もないうちに、素晴らしいことが家の戸口を訪れた。金鉱捜しの男たちは富への渴望に感情も望みも忘れて、ただ太平洋岸に早く着こうという思いでいっぱいだった。彼らは進み方が遅いのにしびれを切らし、荷を軽くするために、西部横断の用意に積んできた大事な商品を原価より安く投売りした。彼らは疲れ切ってはいるがもともと毛並の良い馬や家畜を、開拓者の所有する元気なラバや馬と交換したがった。何をさておき、手持ちの生地、衣料、食料、道具などを、目的地までに必要な最低限度を残すだけにしておいて、旧式な幌馬車と取り換えたのである。こうして、予言者ヒーバー・C・キンボールの予言通りに、「合衆国物資」がグレートソルトレークシチーの街角でニューヨークよりも安く商いされたのである。

その数年後、ヒーバーはある説教の中でこの出来事について語っている。

「予言のみたまは将来を予知する。神はあなたがこうなると言うからではなく、御自身でこうと決めてそれを実現されるのである。予言者が予知するのは、全能者が将来に意図しておられることである。それが私の予言のしかたである。しかし私は予知せずに予言したことがある。他のだれもそれを先見しなかったことと思う。だが私は話

をし、その予言は私の言葉以上に大きく成就された。それは、初めてこの盆地に入植した民の将来に関したことであった。当時ほとんどの人が毛皮を着、だれも貧しく、窮乏していたが、みんな元気だった。私はこのように言った。『兄弟たちよ、あとわずかで、あなたがたは食物や衣料を豊富に持つことになる。それも合衆国の町々で買うより安く買うことになる』と。私はだれか『異邦人』がここへやって来るとは思わなかった。そのようなことは考えてもみなかった。それで話をした後、これは間違いに違いないと思った。このときリッチ兄弟は「とてもそんなことがあるはずはない」と言ったが、私も信じられなかった。しかし聖徒たちが驚き喜んだことには、私の言葉通りのことが、いやもっと大きなことが実際に起きたのである。主は私を正しく導かれたのに、私はそれを知らなかったのである。

私はジョセフ・スミスが幾度もこう言うのを聞いた。自分は主が自分を通して与えられる啓示について非常な試しを受けると。なぜならジョセフには、成就するはずはとてないと思われたからである。私は自分が予言者であるとは思わない。しかし、もしふさわしい生活をしたならば、どの男女も予言ができるということを、私は知っている。」

「ロバート君、君はなぜ主に不平を言ったのですか」

キンボール一家の友人で、長年家族同様に暮らしたロバート・スミスが、このように言っている。

「1857年に私はヒーバー兄弟のもとで働いていたが、あるとき彼に物を乞うて断わられた。それに気分を害して、家に帰ってから、そのことを主に訴えた。翌朝私が仕事に行くと、ヒーバー兄弟は、私を自分の部屋に呼んで言った。『ロバート君、君はなぜ主のしもべのヒーバーのことで主に不平を言ったのですか。さあ、あなたが欲しいものはあげます。今後は些細なことで主に訴えたりしないように』と。」

感謝を神に捧げん

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー長老

私たちは1世紀以上の長きにわたって、「感謝を神に捧げん、予言者の導き」という素晴らしい讃美歌を歌ってきた。それは私たち独特の歌である。私たちは他の教会の歌を何曲か歌い、他の教会も私たちの教会の歌を歌う。しかし「感謝を神に捧げん、予言者の導き。末日に……」と歌うことのできるのは私たちだけである。

この曲は今から1世紀余り昔に、英国シェフィールドに住む貧しい境遇の一男性が書いたものである。彼は製鉄工場で働いていたが、モルモン教会に入ったために解雇された。しかし彼の胸には熱い証が燃えていた。彼はあふれ出る感謝に筆を取り、このすばらしい歌詞をしたためたのである。その言葉は世界数百万の人々の感謝の歌となった。私は、この歌が神よりの啓示を感謝する敬虔な祈りとして歌われるのを21カ国語で聞いてきた。

兄弟姉妹たち、私たちはこの混迷した困難な時代を歩むときに、神よりの知恵の言葉をもって私たちに勧告する予言者の存在を、いかに感謝すべきであろうか、またいかに感謝していることであろうか。私たちが心に抱く確信、神が、再び地に召されたしもべの口を通して民にみこころを伝えたもうとい



う確信は、私たちの信仰と行動の真の基礎である。私たちには予言者があるか、さもなくば無である。私たちには予言者がいるので、すべてがあるのである。

12年前、私は責任を受けて香港に本部を置く伝道部の伝道部長に同行し、フィリピンの伝道を開始した。1961年4月28日に初めての集会が開かれたが、それは出席した私たちにとって決して忘れられないものとなった。そのとき集会を行なうホールはなかった。それでアメリカ大使館に交渉し、マニラ近郊のフォート・マッキンレーにあるアメリカ陸軍墓地にある大理石でできた記念館の美しいポーチを借りる許可を得た。集会は朝の6時半に始まった。悲劇の戦争を記念する神聖な場所で、

平和の福音を教える業が始まったのである。

私たちはたったひとりだけ捜しあてることのできたフィリピン人教会員の家を訪ねた。彼は私が忘れることのできない印象深い話をしてくれた。

彼は少年のときに、ごみ箱の中にはばらばらになりかけた古い「リーダーズダイジェスト」が捨ててあるのを見つけた。そこにモルモンについての本の要約が載っていた。その本にはジョセフ・スミスが書いてあり、予言者と説明されていた。「予言者」という言葉は少年の心に強く響いた。この世の中に本当に予言者がいるものだろうか、と、彼はあやしんだ。その雑誌はなくなったが、生ける予言者がいるという話は、暗く長い戦争の間も彼の心を去ることがなかった。

遂に戦争は終わり、合衆国政府はクラーク空軍基地を再開した。デビッド・ラグマンという名のそのフィリピン人は基地に就職した。そして彼の監督者となった空軍将校がモルモンであることを知った。彼は将校に予言者を信じているかどうか聞いたかったが、聞くのはこわかった。しかし心の葛藤が続いた挙句に、ようやく尋ねる勇気が出た。

青年は聞いた。「あなたはモルモンでいらっしゃいますか。」「はい、そうですよ」という答えがすぐに返ってきた。「あなたは予言者を信じていますか。あなたの教会には予言者がいるのですか」と、真剣な質問が続いた。

「はい、予言者がいます。生きた予言者です。私たちの教会を管理して、主のみこころを教える人なのですよ。」

デビッドは将校にさらに詳しい内容を教えてもらい、その後バプテスマを受けた。彼はフィリピン人で最初に長老に聖任され、現在は北ルソン地方部の地方部長である。今や彼は地上に生ける予言者が存在することを身をもって知ったのである。

自分たちに関心を寄せておられる神のみこころを伺い、それを私たちに教えてくれる人を長に持つこと以上に大きな祝福はあるだろうか。私たちは、「賢き者の知恵も減し、慎み深き者の覚りも物の数」ではないことを知るのに、世の中をあちこち捜し歩かなくてもよい。世の捜し求めるべき知恵は、神よりの知恵である。世を救う唯一の悟りは、神についての悟りである。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス 3:7)

これはアモスの時代もどの時代も同じである。聖なる神の人々は、聖霊に感じて悟った。(Ⅱペテロ 1:21参照) それらの古代の予言者は来たるべきことを警告したばかりか、それよりもさらに大事な、民に対する真理の啓示者となった。生活に平安を見出し幸福になるにはどのように生きるべきかを教えたのは、彼らであった。

ある青年のことが思い出される。彼はキリスト教徒としていろいろな教会をめぐり歩いたが、どこも予言者について教えてはいなかった。予言者たちをあがめるのはユダヤ人の間だけで、そのため彼はユダヤ教を受け入れた。

1964年の夏、彼はニューヨーク市へ行き、万国博覧会を見た。そこでモルモン・パビリオンに入り、旧約聖書の予言者たちの絵を見た。エホバのみこころを啓示した昔の偉大な人々について、宣教師が感謝しながら話すのを聞くうちに、彼の胸は熱くなってきた。そしてパビリオンの先に進むと、近代の予言者について、また予言者、聖見者、啓示を受ける者と言われたジョセフ・スミスについて説明があった。何かが彼の心を動かした。彼の霊は宣教師の証に答えたのである。彼はバプテスマを受けた。そして南アメリカで伝道し、多くの改宗者を得た。彼は家に帰って以来、家族や他の人々を教会に導く器となっている。ジョセフ・スミスが真に神の予言者であり、彼に続く予言者たちもその神聖で高貴な責任の正当な継承者であると彼が証するのを聞くと、私の心は暖かくなる。

偏見をさしはさまずにジョセフ・スミスの話を読むならば、彼が来たるべきことの偉大な予言者であったことを一体だれが疑い得ようか。銃口が火を吹く13年近くも前に、彼は悲劇のアメリカ南北戦争を予言し、それ以後地上のあらゆる国々に戦争が起こると述べた。この世代のあなたがたや私が、その驚くべき言葉が成就されたことの証人である。

彼はまた、当時イリノイ州に住んでいたこの民がやがて追い立てられ、多

くの艱難を経て、合衆国西部ロッキー山脈の間で強大な民になると予言した。今私たちがソルトレークシティのテンプルスクエア、大タバナクルに集まっているのは、このすばらしい予言の言葉が成就したことへの証拠である。

彼の継承者にしてもそうであった。1849年の厳冬のある日、ソルトレーク盆地の先駆者たちがセゴユリの根とアザミの葉で飢えをしのいでいるとき、カリフォルニアで金が発掘された。この地の窮乏状態を脱して将来のあるカリフォルニアへ行くのだと考えた人々に向かい、この場所で古ぼけた演壇に立ったブリガム・ヤングは、予言の言葉を告げた。その中で彼はこう言っている。

「私たちはナベの中から火の中へ、火の中から乾ききった床(西部の砂漠)の真ん中へ追い立てられてきた。私たちは今ここにいる。そして将来もここに留まる。……」

私たちはこの場に至高者に捧げる神殿と町を建設する。私たちは開拓地を西に東に、南に北に広げ、多くの人々が住む町々を建設するだろう。そしてそれにも増して多くの聖徒が世界各国から集まるであろう。

ここは各国の大路となるであろう。王と皇帝と世の貴人、賢人がここに私たちを訪れるであろう。……」

テンプルスクエアの訪問者センターに立ち、毎年何十万、何百万の人々がここを訪れるのを見れば、ブリガム・ヤングが予言者として語ったことに、何の疑いも持てるであろうか。何年か前に、要人が列をなして大管長会事務室に足を運び、私たちが教会の大管長、現在の予言者として支持する人との面

一言するのを許していただきたい。他意はないつもりである。リー大管長の半生の幾分かを知る人ならば、その同じ影響が彼にも働いているのを否定できないであろう。彼は、今でいえば貧困とされる境遇から身を起した人である。彼は筋肉労働の意義を、じかに経験して知っている。彼は宣教師となり、訪ねた大半の家で拒まれた経験を持つ。また、苦学をし、大病をわずらって生死の境をさまよった。また、悲しみの暗く深い谷間を歩いたこともある。生涯をすりかえてみれば、すべてがあの通り、他人の苦勞と苦惱と悲嘆をさらに理解できるようにとの鍛練の道程にはかならないのである。そしてそれと共に、不幸や悲嘆にめげず、接するすべての人をより高い次元に引き上げるたくましい気力があった。

私は最近、リー大管長の後輩同僚としてヨーロッパと英国の伝道部をめぐってきたが、青年たちは大管長に強い感銘を受け、目に涙をたたえ、顔に美しいほほえみを浮かべて大管長を見つめていた。彼が聖典から救い主のように「権威ある者として」語るとき、宣教師たちは心を奪われた様子ですわっていた。子供たちは、聖餐の聖なる真理を理解させようと子供の言葉で語る彼の話に、身じろぎもせず聞き入っていた。彼が祝福を与えるとき、年老いた男女は泣いていた。

たくましい青年が大管長にすぎり、目をうるませて「こんなに天国に近い気持を味わったことはありません」と言っていた。このときほど感動的な光景を目にしたことはない。

私はみたまの証を受けた者として、彼の予言者の召しを証し、地上数百万

の民と声を合わせて「感謝を神に捧げん、予言者の導き。末日……」と歌うのである。私は感謝している。主のみところを行なうときにこの民にもたられる平和と進歩と繁栄に満足している。そのみところが主の予言者から告げ知らされるからである。もし私たちが彼の勧告を守らないならば、彼の聖なる召しを否むことになる。もし彼の勧告に従うならば、私たちは神から祝福されるであろう。

汝がために祈る、愛する予言者よ
慰めと力とをたもうよう。

しわ刻まれる歳月に

内なる光、今のごと輝きいでんことを

(英文讃美歌 P. 386)

神は生きておられ、永遠の真理を啓示される。イエス・キリストは私たちの救い主であり、この教会の頭である。地上には予言者がいる。私たちを教える聖見者、啓示を受ける者である。その教えに従うよう、神が私たちの心に信仰と修養とを与えたもうことを、へりくだって祈る次第である。イエス・キリストの御名により、アーメン。

(第 143 回半期総大会での説教)

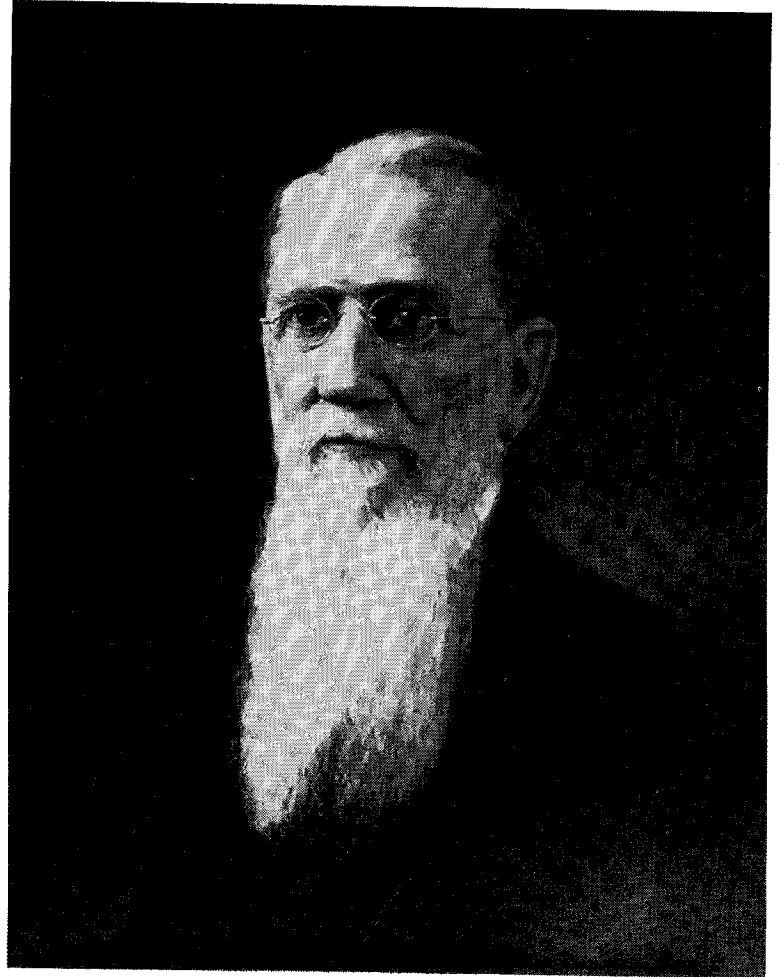


死者の贖いの 示現

末日聖徒イエス・キリスト教会
第6代大管長

ジョセフ・F・スミス

(1838—1918)



末日聖徒イエス・キリスト教会第6代大管長ジョセフ・F・スミスは、1838年11月13日、ミズーリ州ファーウエストでハイラム・スミスとメアリー・フィールドینگ・スミスの息子として誕生した。1844年6月27日には、父と叔父である予言者ジョセフ・スミスをイリノイ州カーセージでの殉教で失った。1846年、アイオワからネブラスカのウィンタークォーターズまで母の荷車を駆り、その2年後、家族の全財産を積んだ牛車を駆って草原を横切り、ソルトレーク盆地に着いた。1852年9月21日、ソルトレークシチーで母を亡くした。1854年4月の総大会の時、弱冠15歳でハワイへの宣教師に召

された。1866年7月1日、使徒職と副管長に聖任され、1867年10月8日十二使徒評議員会会員に任命されるまでその職に就いた。1880年10月10日、ジョン・テイラー大管長の第二副管長に召され、ウィルフォード・ウッドラフとロレンゾ・スノー両大管長のもとでもその職を果たした。さらに、1901年10月17日に大管長に支持された。1918年11月19日にソルトレークシチーで死去。1918年10月3日に受けたこの示現は、同月31日に大管長会副管長、十二使徒評議員会ならびに大祝囃師の前に提出され、全員一致で受け入れられた。

1918年10月3日、私は自分の部屋にいて聖典の言葉を心深くに留め、世を贖うために神の御子が払われた大きな贖いの犠牲と、世に贖い主が来られるにあたって御父と御子の表わされた大きなすばらしい愛に思いをはせていた。その愛は、主の贖いを通し、福音の諸原則に従うことにより、人類が救われ得るという愛である。

私はこのように思いをめぐらしていると、主が十字架上で亡くなられた後に福音が宣べ伝えられたポンタス、ガラテヤ、カッパドキア等、アジアの地方に散在する初期の聖徒に宛てた使徒ペテロの書簡が心に浮かんできた。私は聖書を開いて、ペテロの第一の手紙第3章と4章を読み始めた。すると私は次の聖句にかつてないほどの強い印象を受けた。

「キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。

こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。

これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかつ

た者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。」(Ⅰペテロ3:18-20)

「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」(Ⅰペテロ4:6)

これらのことについて深く考えていると、理解の眼が開かれ、また主のみたまが私の上にとどまった。そして私に小さき者と大いなる者の死者の群れが見えた。おびたしい義人の霊が群れをなしてひとつ所に集まっていた。彼らはこの世にあってイエスの証に忠実であり、神の御子の偉大なる犠牲に似た犠牲を捧げ、贖い主の御名によって苦難を受けた者たちであった。これらすべての者たちは、父なる神と父の生みたまいし独り子イエス・キリストの憐みにより得られる栄えある復活に確固たる望みを抱いてこの世を去った者たちであった。

私は彼らが喜びに満たされ、解放たれる日が目前に迫っているために共に喜んでいるのを見た。彼らは、神の御子が霊界に來たりたもうて、死の縄目からの贖いを宣言されるのを待ちつつ集まっていた。彼らの眠れる身体は、骨はその髄までもまた髄と髄を覆う肉

も完全な形に回復され、霊と肉は再び分かれることのないように結合され、彼らは完き喜びを受けようとしていた。

この大群衆が死の鎖から解き放たれるときを喜びながら待ち、語り合っていると、神の御子が現われたもうた。そして、忠実であった捕われ人に自由を宣言し、また永遠の福音および復活の教義、墮落からの贖い、悔改めを条件とする個人の罪よりの贖いについて彼らに説き教えられた。しかし、神の御子は邪惡な者たちの所へは行かなかった。そして、神を敬わない者、肉体を得ていたときに自らを汚し悔い改めない者には主は御声をあげられず、また古代の予言者たちの証と警告に耳を傾けなかった不従順な者たちは、御子にまみえることも、御子の顔を仰ぎ見ることもなかった。これらの者のいる所は闇に支配されていたが、義人の中には平安があった。そして聖徒たちは自分たちの贖いを喜び、ひざまずいて死と地獄の鎖からの解放者、贖い主である神の御子に感謝を捧げた。彼らの顔は輝き、主の御前よりの光が彼らの上にとどまり、彼らは主の聖き御名をたたえて歌った。

私にはこのことが不思議でならなかった。なぜなら、救い主はユダヤ人とイスラエル家の人々の間にあって約3年間導きと教えの御業に携わり、彼ら

会を求めたことがあった。世界各国の政治、経済、教育、法曹の指導者がそこに見られた。彼らは、教会員がのけ者にされ、山間の荒野で孤立していた時代にブリガム・ヤングが「賢き者、貴き者」と語った人々である。

2週間前、私たちは飛行機でサンフランシスコからオーストラリアのシドニーに向かった。機上で、近くの席にすわった青年が「アメリカの予言者ジョセフ・スミス」という本を読んでいるのに気づいた。私はこれ幸い彼に話しかけた。自分もその本を読んだことがあること、著者を知っていることを

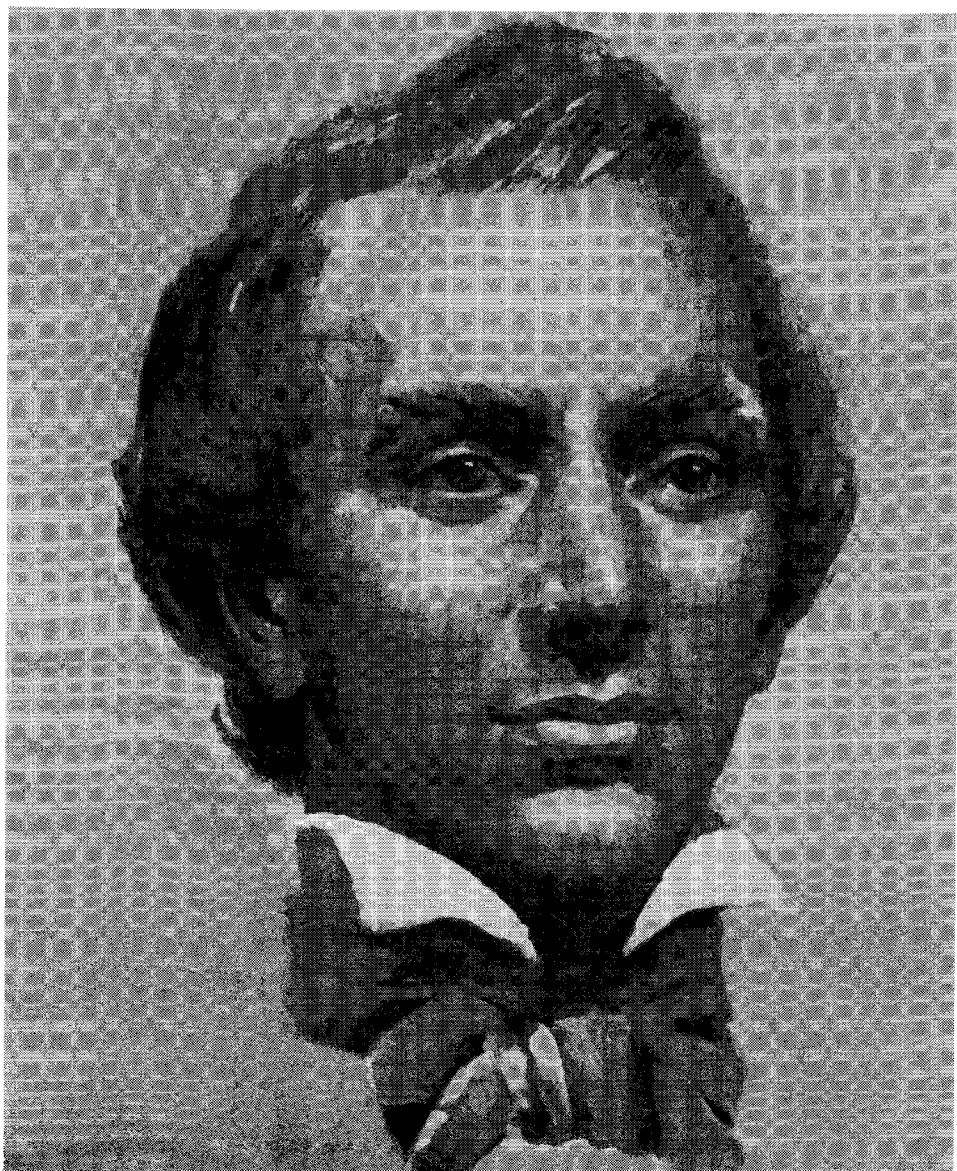
話してから、どんな関心があるのか尋ねてみた。彼はいろいろと答えてくれたが、中でも予言者に関心があり、現在も予言者がいるということに興味をそそられたという。図書館でその本を見つけたとのことであった。長々と話した中で、私はジョセフ・スミスが本当に予言者だったことを証した。彼は来たるべきことを語った。しかしそれより大事なのは、彼が永遠の真理の啓示者、主イエス・キリストの神聖な使命の証し人だったことである。あの青年が研究を続け、やがて心にこれと同じ証を持つようになることを願って

いる。私はきっとそうなることを確信を持っている。

兄弟姉妹たち、私はジョセフ・スミスが予言者として、全能者の御手に使われてこの業を回復したと同時に彼に続いた人たちのことを深く感謝している。彼らの生涯を研究すれば、主がいかにして彼らを選び、永遠の目的にかなうように練り鍛えられたかがわかる。ジョセフ・スミスはあるときこのように語った。「私は、高山から転げ落ちる巨大なごつごつした石のようだ。……地獄が総力を尽くしてこっちの角あっちの角と砕きけずり、そうして私は全能者の矢筒の中のなめらかに研かれた矢になるのだ。」

彼は憎まれ、迫害された。追い立てられ、投獄された。ののしられ、打ちたたかれた。彼の生涯を知れば、彼自身の語った変遷の跡が歴然とする。一生の間で力は増し加えられた。鍛練された。自分の命よりも他人を愛する愛が養われた。荒けずりの石の角がけずり取られて、彼は全能者の御手の中の研かれた矢となったのである。

ジョセフ・スミスのあとを継いだ人々にしても同じである。長年の献身の間に、彼らは鍛えられ、選り分けられ、試されて、全能者の目的にかなうように作り上げられたのである。ブリガム・ヤング、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョセフ・F・スミスらの生涯について読めば、だれがそれを疑い得ようか。主は彼らの心を和らげ、性質を練って、後に彼らに負わせたもう大いなる神聖な責任の備えをさせられたのである。それは、愛する指導者、現在の大管長ハロルド・B・リーについても同じである。ここで大管長について



に永遠の福音を教え、悔改めを呼びかけることに力を尽くされたが、しかし主の力ある御業と奇跡、大いなる権威と権能による真理の宣言にもかかわらず、主の御声に耳を傾け、主の御許で喜びを受け、救いを手にした者はほんの少数であることを私は知っていたからである。しかも主の死者への伝道は十字架上の死と復活の間のわずかな時間に限られていた。神の御子は、昔ノアの時代に神が寛容をもって待っておられたのに従わないために獄に捕われていた霊たちのところへ行って宣べ伝えられたとペテロは語っている。主はこれほどわずかな時間でこれらの霊に宣べ伝え、必要な御業を成し遂げることがどうしてできたのだろうか、ペテロの言葉を不思議に思った。

私が不思議に思っていると、私の眼は開かれ、理解が早められた。そして私は、主が真理を否定した邪悪な者、不従順な者の中へ行って教えられたのではないことを知った。主は義人の中から軍を組織し、権威と権能をまとった使者を任命し、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行く権限を与えられたのであった。このようにして死者に福音が宣べ伝えられたのである。選ばれた使者は行って、主に受け入れられる日を告知し、自らの罪を悔い改めて福音



を受け入れるすべての者にその捕われの身からの自由を宣言した。このようにして、真理の知識がなく自ら罪のあるまま、すなわち予言者を拒んでいた背罪のあるまま死んだ霊たちに福音が宣べ伝えられたのである。これらの霊に、神への信仰、罪の悔改め、罪の赦しを受けるための身代りのバプテスマ、

按手によって授かる聖霊の賜、その他肉においては人間として裁かれ、霊においては神に従って生きる資格を得るために知る必要のある福音のすべての原則が教えられた。

このように、小さき者にも大いなる者にも、不義な者にも忠実な者にも、死者の中に、神の御子の十字架での犠

牲を通して贖いがもたらされたことが知らされた。贖い主は、肉体にあるときに主を証した忠実な予言者たちの霊が、主御自身が彼らの反抗と罪のゆえに行くことのできないすべての死者に贖いのおとずれを携えて行き、それらの死者が主の僕の働きにより主の御言葉を聞くことができるように教え、準備されて、霊界での滞在期間を過ごされた。

この義人の大会衆の中に集まっていた大いなる力ある者の間には、日の老いたる者、すべての人の先祖である父祖アダムがいた。また栄えある母イヴが、真の生ける神を礼拝し、歴史を通じて生きてきた多くの忠実な娘たちと共にいた。最初の殉教者アベルも、その弟で、父アダムに生き写しの力ある者の一人セツもいた。洪水を警告したノア、偉大な大祭司セム、忠実な者の父アブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの偉大な立法者モーセもいた。さらに、贖い主が謙遜な者を集め、捕われ人に自由を宣言し、捕われている者の獄を開くために油を注がれていると予言したイザヤもそこにいた。

死者の復活のときに肉体をまとして生ける霊の結合体となる乾いた骨のある大きな谷を示現で見たエゼキエル、末日に神の王国が建てられ、いつまでも、滅びることも他の民の手に渡され

ることもないことを予見し、予言したダニエル、変貌の山でモーセと共にいたエリヤもいた。またモロナイも予言者ジョセフ・スミスに告げたが、エライジャの訪れを証し、主の大いなる恐るべき日に先立ってエライジャがつかわされることを宣言したマラキもそこにいた。予言者エライジャは父に与えられた約束を子の心に植え、全地がのろいをもって撃たれ、主の再臨のときに滅びることがないように、死者の贖いと子と両親との結び固めのため時満ちたる神権時代に主の宮居において行なわれる大いなる御業を予め示した。

これらすべてに、ニーファイ人の中にいて神の御子の降誕を証した予言者たちをはじめ多くの者が、この大会衆の中にいて解放を待っていた。なぜならば、死者は霊と体が長い間分離していることを束縛と考えていたからであった。主は彼らに、主が死より復活された後に、よみがって御父の王国に入り、不死不滅と永遠の生命の冠を受け、その後主が約束されたように各々の働きを続け、主を愛する者のために備えおかれたすべての祝福にあずかる者となることを教えられ、そのための力を授けられた。

神殿の建築、また、死者の贖いのためにそこで行なわれる儀式を含む、偉大な末日の業の基を置くために時満ち

たる時代まで備えおかれた、予言者ジョセフ・スミス、私の父ハイラム・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフその他選ばれた霊たちも霊界にいた。また私は、神の教会で治める者となるよう時の初めに選ばれた高貴にして偉大なる者たちの中に彼らがいるのも見た。彼らは、生まれる前から他の多くの者と共に霊界で最初の教えを受け、主の定められたときに出て行き、人を救うために主のぶどう園で働くよう準備していた。

私は、この神権時代の忠実な長老たちが、この世を去った後も、死者の住む大きな霊界において闇と罪のかせのもとにいる者たちの間で、神の生みたまひし独り子の犠牲を通じて得られる悔改めと贖いの福音を引き続き宣べ伝えているのを見た。悔い改めた死者は、神の宮居の儀式に従うことによって贖われ、自らの罪の代価を支払い、清く洗われた後にその働きに応じて報いを受けるであろう。彼らは救いを受け継ぐ者だからである。

このようにして、死者の贖いに関する示現が私に明らかにされた。私は、救い主イエス・キリストの恵みにより、この記録が全く真実であることを証する。アーメン。

先輩と語る

先輩 柏倉 仁兄弟 (34歳 建設工事会社勤務)

後輩 鈴木 茂兄弟 (24歳 銀行へ入社)

私はこの4月から社会人としてスタートします。「がんばって働こう」とのやる気とともに「大丈夫かな」との心配もあります。すでに10年余りの経験を持っていらっしゃる先輩とお話していると、次第に「よしやれる」との力がわいてきました。そのいくつかをご紹介しますみましょう。

自分だけが教会員であるとの違和感がありましたか。

そういう時もあると思いますが、自分の方から、からに閉じ込めようとするのではなく、仕事に自信をつけ、自分はイエス・キリストの福音をいつわりなくほんとうに行なっているとの自信をつければ、皆んなと暖かくやって行けると思います。

つまらないと思う仕事をするように言われたことがありましたか。

ありますね。でも仕事というのは、くだらないことさえできなければ、何んにもできないと思いますよ。

会社の人たちとの交際は どうしておられますか。

酒もタバコも飲まないし、夜は集会に行かねばならないと思うと交際する時間がないように感じられますね。しかしよく考えて見るとお互いに接する時間は非常に多いんですよ。仕事でも接しますし、昼食の時でも接します。一緒に帰る日だってあります。退社後だけに交際があると思わないで、ふだんの時間を大切に生かすようにしています。夜よりは昼間の時間の方がずっと長いと思いますよ。

教会活動を行なうために残業を どうしておられますか。

月曜日は家庭の夕べ、火曜日は指導者会、水曜日はホーム・ティーチング、木曜日はMIA、金曜日は支部長会というような時もありましたので、夜残業するのは大変でしたね。その打開策として、朝一時間早く行くことにしました。そして他人の仕事も手伝うという気持がないと、イエス・キリストの福音を職場で実践することはむづかしいと

思いますね。

出世することについてはどう考えておられますか。

あまり出世しようしようとするのではなく、まずイエス・キリストの福音を実践しようとすることにウエイトをおくことだと思います。そうすることが結局は自分が信頼され、高められることになると思っています。これは消極的な考えのように感じられるかも知れませんが、私はこれこそ積極的なやり方だと思っています。

キリストの福音の実践についてもう少し話してください。

福音の実践の中で最も大切なことは愛だと思います。教会での愛や家庭での愛は実行しやすいかも知れませんが、社会での愛は、大変なんですね。しかし、モルモンとして最後までやり通すためには、この苦しみを乗り越えねばならないでしょう。お客さんに対して、下請さんに対して、上司、同僚に対して愛をもって接するように努力することだと思います。時間を守る、約束を守る、誠実につき合うことなどからはじまりますね。そのような積重ねが信頼される人をきずくと思います。

知恵の言葉での問題がありましたか。

とてもショックなことがありました。入社の時、専務さんから面接を受け「この会社は酒を飲めない人間はダメなんだ」と言われたんです。その時はほんとにダメなのかと真剣に考えました。それからしばらくして、昼食会の時だと思いますが、自己紹介の機会がありました。その時私はモルモン教徒で、酒、タバコ、コーヒー、お茶などはやらないが皆さんと仲良くやっていきたいというような宣言をしましたところ、その後専務さんがうしろを通られた時、私の肩をたたいて「この間のことは、冗談だから気にするなよ」と言われたんですね。その時とてもうれしくて勇気がわいてきたような気持でした。

「あの人は飲まないからいじめてやろう」と真剣に考えている人はまずいませんよ。お得意様との酒宴になった時でも、はっきりさせないで黙っていると皆んなからさそわれてかえって失礼になりますね。恥ずかしいと思わないで説明することです。しかしいばるのではなく、けんそんに誠実に理解を求めることだと思っています。

教会と仕事の両立について、どんな工夫をされていますか。

上司から「教会が大切な仕事が大切か」と言われたことがあります。まず、やらねばならぬことは、やることです。そしてモルモンですから普通の人以上にたゆまぬ努力をすることだと思います。真剣に仕事と取りくんでいてと理解してくれますよ。もう何も言われませんし、「君のよ

うな生活は僕にはむづかしい。がんばってくれよ」と励まされることさえありますよ。

教会員としての喜びはどうでした。

たくさんありますよ。会社の仲間と、お客様を訪問しました。仲間が私を紹介する時「私は信用できないかも知れませんが、この人間は信用できるから心配しないで仕事をまかせて下さい」と言うんですね。その時私はモルモン教徒として忠実に戒めを守っていて良かったと思いました。ひとりで海外のお客様をたずねた時「モルモンなのでお酒は飲まない」と言ったところ、その方は「モルモンではないが私も飲まない。しかしモルモンは良く知っており真面目な人々だ」と言って、私をいろんな人に「真面目な人だよ」と紹介して下さい、ほんとに助かりました。その方はオークランド神殿の近くに住んでおられたんです。

宗教はちがいますが中近東へ行った時も、「あなたのように真面目に戒律を守っている人は、私たちの国でもだんだん少なくなりました。今度日本へ行って商談をまとめる時は、ぜひ立会人として同席して下さい。信頼できる人を探していました」と喜んでもらったこともあります。

とにかく、教会や家庭での愛の実践はやさしいでしょうが、社会での実践をめざして努力することですね。そうすれば、思わぬ時に「よかったなあ」と感じる喜びがたくさんありますよ。自分で壁をつくったり、へんなからに閉じ込めようとしないで、積極的にやってみて下さい。

「イエス・キリストの福音の実践」社会人としての出発は、そのまさに正念場である、というのが、柏倉兄弟のお話から私の受けた総括的な実感でした。

そして、兄弟の言葉ひとつひとつに感じる、まぎれない確かさは、教会員としてのみならず社会人としての自信と実績に裏打ちされた所為であると痛感しました。

しかし、それが単に一朝一夕に成し遂げられたものではなく、時間がかかり、試行があり、そして人の数倍の努力があって、その過程に始めて存するものであったことをお話していただいたとき、だからこそ、私たちにもやれるし、またやらなければならないとひとつの自信を持って感じたわけです。

一瞬たりともモルモンであることの自覚と自信を失念することのないように、しかも気負うことなく。—そうすれば、必ず道は開ける。—これが、私の得た結論のひとつでした。

最後に、このような機会があったこと、そして模範としての先輩たる指導者が、私たちに数多くいますことを、心から感謝いたします。

ハワイ島での経験

神 尾 昇

大阪ステーキ部長

昨年11月中旬、社用でハワイ島へ旅行したときに良い経験をいたしました。

ホノルル空港を離陸した飛行機は、折りからの朝日を翼いっぱい浴びて、あたかもその前途が大きく開かれているかのようにでした。約1時間の飛行後、コナ空港に着陸しました。コナ空港は原住民の住居をアレンジしたポリネシア風の建物で、コンクリート・ジャングルに馴れてしまった私たちには、かえって新鮮さと、自然を大切にする思いやりを知ることができました。このように、ハワイ島での第一歩は、好印象で始まりました。出迎えてくれた現地会社の人の案内でマカデミア・ナッパ農園へ到着。農園管理会社のスチュアーター社長の出迎えを受け、さっそく商談に入りましたが、商談の前に本場コナ・コーヒーが出されました。私がコーヒーに手をつけずにいると、スチュアーター社長は、「コーヒーはお飲みになりませんか」と質問されますので、いつもの通りに「モルモン教徒ですのでコーヒーは飲みません」と、教会での役職を示す名刺を手渡しました。

彼はそれを見て一瞬顔色を変え、次に、ていねいな言葉使いで「大阪ステーキ部長ですか」と再び尋ねられますので、「はい。大阪ステーキ部長です」と返事しますと、彼は急いで電話を取り上げ、ダイヤルを回しはじめました。そして電話の相手に「今、事務所に日本のステーキ部長が来られているので、すぐ来るように」と話したようでした。10分位して表に車の止まる音が聞こえると、スチュアーター社長は私を表に誘いました。車から婦人が降りて来ますと、「私の家内のスチュアート姉妹です」と紹介して下さいました。彼女は私との対面を非常に喜んでくれました。さらに、スチュアーター社長は、小さな声で、「彼女は、自分がバプテスマをほどこしたのです」と、末日聖徒であることを初めて話してくれました。現在は不活発会員となっており、知恵の言葉も守っていないことも、事務所でのコーヒーでわかりました。しかし、昼食時に、他の人たちがビールで乾杯したとき、彼は私同様ジュースを飲み、食後のコーヒーも、タバコにも、私たち一行が農園を離れるまで二度と手をつけようとはしませんでした。その上、別れるとき、彼は私の手を強く握り「神

様があなたを祝福して下さいますように、お会いできたことを光栄に思います」と、私の顔をじっと見つめておられました。私も心に強く感じましたので、祝福の言葉を残し、彼のもとを去りました。明るい朝日の輝きはこのことではなかったのかと感激で胸がいっぱいになり、彼らが再び活発な会員に戻れるようにと祈らずにはおられませんでした。

南国の夕日を背に受け、マウナ・ケアの雄大さに目を奪われながら、ワイメアにあるホテルに到着しました。

ホテルに入るやいなや、フロント・マネージャーが私たちに向かって「カミオさんはどなたですか」と突然言います。自分の名前を呼ばれて驚きながら名乗り出ますと、マネージャーは「あなたはラッキーですよ、本当にラッキーですよ」と重ねて言いました。私は何がラッキーなのか全然わからず、ただボカンとしていますと、「あなたは大変なものを忘れてはいませんか」と尋ねます。「いや何も。今初めてここに来たのですが」と返答しますと、「札入れですよ」とマネージャーは続けて言いました。そこでポケットに手を入れてみると、私の全財産(?)は跡形もなく消え失せているではありませんか。シマッタ! 何回も海外旅行を経験しておりますが、このようなことは初めてで、一瞬「困った」と思いました。するとマネージャーは「ジョージが拾ってくれたんですよ。彼は正直な人だから、連絡してくれたのですよ。」ジョージとはスチュアーター兄弟のことでした。さっそく彼の家に電話してみると彼は待っていたらしく、「事務所から帰ると応接間に札入れが落ちているので、中を調べました。神殿推薦状であなたのものとわかり、急いで連絡を取ったのです。明日必ず届けます。」彼は親切に私にそう言って下さいました。心温まる兄弟愛を感じ、偶然とは思えぬ出来事に、何か大きな力が働いたのではないかと確信しました。

深刻な水不足に悩まされていたヒロ地区は、私たちが着いたその夜から大変な雨が降り、翌朝も降り止まず、高速道路も通行不能になったほどでした。

この大雨の中をわざわざ届けて下さった、アローハの精神の温かさが強く印象に残り、実り多き旅であったことを感謝

しつつ帰途につきました。

私はこのたびの経験から、末日聖徒として守るべき原則を学びました。スチュアーター兄弟の正直と親切、それは、今の殺伐とした世の中に欠けているものではないでしょうか。小さな親切、善意が人々の心に平安をもたらすに違いありません。

われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行なうべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく、われらはすべてのことを信じ、すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば、あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。(信仰簡条、第13条)

転 勤

矢 野 信 保

長崎支部

私は昨年の3月まで長崎支部のあります長崎市からバスで1時間半ほど離れたところに住み、その小さな中学校に勤めておりました。バスが1時間に1本あるかないかの所で、午後8時には最終バスが出てしまいます。そのために私は、伝道部長の特別許可をいただき、土曜日の夜は支部長会ができるよう教会に宿泊をして、さらに日曜日の集会に出席していました。このような状態ですから、教会の仕事を十分になすことができないで、長崎支部のみなさまには多大な迷惑をかけて参りました。ですから、3月のこの機会に是非とも長崎市内に転勤しなければならないと考えておりました。

3月の異動のため、意を決して私は学校長に長崎市内への転勤を申し出ました。そのとき校長は私の希望を聞いてちょっと考え込み、「ちょっとむずかしなかい」そう一言言われました。郡部から市内に入るといことは非常にむずかしいことであり、さらに免許教科によって入れるものと入れないものがあります。私は社会科の免許を持っておりますが、社会の先生は、市内にはもういっぱいになっています。「しかしどうしても行かなければなりませんのでお願いします。」そう校長に申し入れました。

私は何とかして長崎市内に行きたいということで、いろいろ手をつくし、私の先輩で校長をしている方が長崎市内におられるということがわかって、訪ねて行って事情を話し、力になっていただけるようお願いしました。その先生も「むず



スチュアーター
兄弟姉妹

かしい。社会科は余っとるケンネ」とこう言われました、手をつくして下さったようですが、結局同じ結論でした。ちょうど私の住んでいた村は昨年3月で長崎に編入することになっていました。ですからその校長先生はこうおっしゃいました。「1年待ちなさい。そうすればあなたの今住んでいるところは長崎市になる。市内から市内への転勤はわりと楽です。1年待ちなさい。今からならまだ転勤希望を取り消して留任願いを出せばかなえられるはずだからそうしなさい。もし希望を出していて市内に入れなくて遠い所へ転勤するようなことがあれば、来年も市内に入ることとはとてもむずかしいだろう」と心からすすめて下さいました。「しかしどうしても今度は市内にはいられなければならないんです。よろしくお願いします」と再度たのんで帰ってきました。

教会の兄弟姉妹や宣教師の方々はこのことを非常に心配して、みんなで断食をしてお祈りして下さいました。私どもも同じように真剣にお祈りをいたしました。

だんだん日が過ぎて3月に入りました。本当なら、学校長には何らかの情報が入るはずですが、何の音さたもありません。また、幾人かの知人をお願いしていたほうも全く当てにならないということで、最後は神様の力以外に頼るものはありませんってしまいました。本当に真剣にお祈りしました。

その後校長は私を呼んで「あなたは転勤希望を出しているけれどいまだにその結果どうなるのか情報が全く入りません。しかしこの学校としては新年度の計画を立てなければならぬのであなたを除外して行事を組んで行きますから了承して下さい。」そう言われました。もし、宙に浮いた存在になれば、長崎県は島が多いので、そちらに行くようになるのが通例です。私はなおのこと真剣に祈りました。

いよいよ異動の発表の日が来ました。校長先生が人事委員会からの辞令を持って、転勤する先生方を発表します。「この学校から3人の方が転勤なさいます。まずはじめに教頭先生、松島の中学校へ転勤なさいます。次に今泉先生、崎戸島へ。次に矢野先生」私は思わず目をつぶりました。前に呼ばれた2人とも島への転勤でしたので私もまた島だろうと思いました。一生懸命お祈りしましたが、これまでの支部での努力が足りないため、神様は島へ行くようにと望まれたのかもしれません。学校長は「矢野先生、長崎市の桜馬場中学校へ転勤なさいます。」そうおっしゃいました。私はあまりにも熱望していたため、聞きまちがいではないかと思って、すぐ隣の先生に「今、校長先生 何とおっしゃいましたか。」「桜馬場ですよ、よかったですね。」そこは長崎でも一番大きい中学校です。しかも市の中心にあって、教会からすぐの所です。長崎では普通郡部から市内に入るとき、まず周辺部に転勤になり、それから何年か経って中心部へとだんだん移動して行くのが慣例です。いきなり中心部の学校に転勤するということはかつてなかったことです。

神様は、私たちが心をひとつにしてお祈りをしたときに、それを聞き届けて下さったことを本当に感じました。私共のようなつまらない者にも神様はこんなに大きな祝福を与えて下さったと本当に感謝しています。



矢野御家族

長崎市にいよいよ転居することになりましたが、まだ家が見つかっていませんでした。ホーム・ティーチャーのふたりの兄弟始め、多くの兄弟姉妹が自分の仕事を犠牲にしてまで家さがしや、引越しの手伝いをして下さったのです。今までのは、4月3日に空け渡す約束でした。しかしその前日になってもみつかりません。が、兄弟姉妹のお祈りによって、その夜9時頃に場所的にもとても良い家が見つかり、そこへ越すことができました。

この転勤によって私の俸給は、手当などがなくなったために7,000円少なくなりました。そして新しい家賃は今までの4倍に上がり、その上長男が幼稚園に行くことによって出費がぐんとふえました。しかし、そのようなものは問題にならない大きな祝福を、私と、私の家族は受けることができました。子供たちは、子供日曜学校やプライマリーによく出席してその教えを受けることができるようになりました。また姉妹も扶助協会への出席、訪問教師としての活動もできるようになりました。そのことは、私にも、家族にもいろいろな現象があらわれて参りました。これら教会のプログラムは神様が準備してくれたものであることがよくわかりました。

神様は本当に生きておられます。私たちが心から神様に願うときに必ずそれを聞き届けられます。私たちの教会は真の神様の教会でございます。大管長は神様から遣わされている方であることを証いたします。すべてイエス・キリストの御名によって、アーメン。

矢野兄弟は、現在長崎支部長を解任され、北九州地方部評議員兼、地方部伝道部長の責任にあります。

